和歌山県海南市

岡村遺跡発掘調査概報

― 亀の川改修工事に伴う発掘調査―

1983．7

社団法人　和歌山県文化財研究会

例　　言

1．本書は、昭和57、58両年度に実施した亀の川改修工事に係る岡村遺跡発掘調査の概要報告書である。

2．発掘調査は、社団法人和歌山県文化財研究会が和歌山県教育委員会の指導のもとに和歌山県から委託を受けて実施した。

3．発掘調査に要した経費 8,200千円（昭和57年度調査経費 4,600千円及び昭和58年度調査経費3,600千円）は、すべて県土木部和歌山土木事務所が負担した。

4．発掘調査は、社団法人和歌山県文化財研究会において組織した調査委員の指導のもとに昭和57年度に亀の川右岸部を主任技術員　松田正昭が、昭和58年度に左岸部を技術員　土井孝之、同村田　弘がそれぞれ担当して実施した。

5．発掘調査に当って県河川課、和歌山土木事務所及び海南市岡田在住の多田健一氏から種々協力をいただいた。

6．出土遺物の整理は、土井並びに村田が担当し、大岡康之、窪田雅秀、中村悦子、松嶋成子、山本秀樹の諸君の協力を得た。

7．本書の作成は、調査担当者が分担して執筆し、松田の助言のもとに土井が編集した。

8．調査委員会並びに事務局の組織は下記のとおりである。

○調査委員

羯磨正信	（和歌山県文化財保護審議会委員）
巽　正郎	（　〃　）
都出比呂志	（　〃　）
藤澤一夫	（　〃　）

○事務局

常務理事	鍋島伊津夫	（県文化財課長）
(前) 〃	山田　実	（前 文化財課長）〈昭和58年5月31日まで〉
(前) 〃	畑村半亮	（前 文化財課長）〈昭和57年5月31日まで〉
事務局長	伊藤正也	（(社)和歌山県文化財研究会事務局長）
(前)事務局長	海野正幸	（前 和歌山県文化財研究会事務局長）〈昭和57年8月31日まで〉
次　長	北野全美	（県文化財課主幹）
〃	梅村善行	（〃 文化財保護主事）
(前) 次長	土井清司	（(前)県文化財課課長補佐）
幹　事	桃野真晃	（〃 文化財第二係長）
書　記	森本一臣	（〃 主事）
調査員	松田正昭	（〃 主査）
〃	土井孝之	（(社)和歌山県文化財研究会技術員）
〃	村田　弘	（〃　〃）

目　　次

1．調査に至る経緯と経過 …… 1

2．遺跡の位置と環境 …… 1

3．調査の概要 …… 4

4．まとめ …… 14

1．調査に至る経緯と経過

岡村遺跡は、海南市岡田を中心とした一帯に所在する縄文時代後期から室町時代までつづく集落遺跡である。当遺跡は、昭和20年代より県下でも著名な弥生遺跡として知られていたが系統だった調査が行われていなかった。そのため、昭和52年度から同54年度にかけて範囲確認調査が実施され、遺跡の範囲・存続期間等の一端が明らかにされ、改めてその重要性が認識されるに至った。(註1) また、昭和55年度には、先の確認調査で実施できなかった且来周辺の岡田八幡宮周辺遺跡群の確認調査が実施され、多大の成果を得ている。これらの調査は、海南市が事業主体者であったため両市境に位置する亀の川を越えて和歌山市域の具体的な調査は行なわれなかったが、(註2) 海南市側の亀の川堤防下に設定されたグリッド（52年度No.12グリッド）において、弥生時代中期（Ⅳ様式）の広口壺、高杯脚台部等の土器の出土があり、和歌山市側へ遺跡が拡がっていることが予想されていた。(註3)

今般、岡村遺跡の北側を流れる亀の川の改修工事が行なわれることとなり、これに伴う事前発掘調査として、昭和57年度に亀の川北岸を、同58年度に南岸の調査を実施した。

なお、確認調査の際使用した基準ポイント岡村１、岡村2が抜き去られるという手痛い被害のため、確認調査と同一の基準座標が使用できず、任意の割り付けを行なった。その後、応急処置として調査区周辺の平板測量を行ない、同一の1000分の１の地形図内に今回の調査区を割り込むという方法を取らざるを得なかった。

（土井）

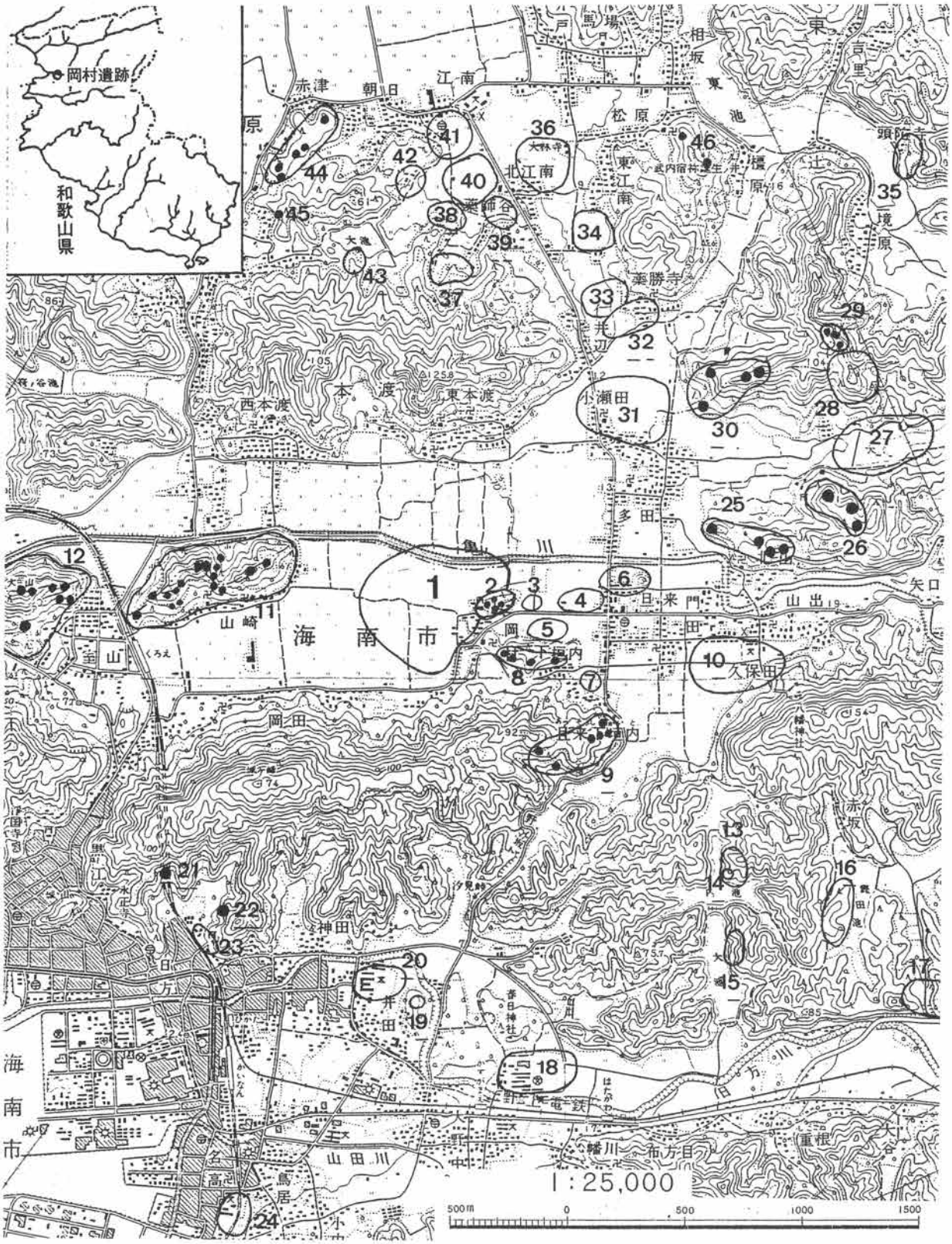
2．遺跡の位置と環境

(1) 地理的環境

岡村遺跡は海南市岡田地区一帯に所在する集落遺跡である。周辺は沈降山地である和歌山東山地の西端にあたり、この付近では山並は連続せず大小いくつかの独立丘陵となって点在している。このため複雑に入りくんだ景観をなし、これらの間を縫って亀の川が西流しその両側に小沖積平野を形成している。

遺跡はこの亀の川を眼前に望む沖積平野の南、宮山と称される小独立丘の北西裾を中心とした標高６～８ｍの微高地上に位置する。遺跡の南は標高175ｍの城ケ峰を中心とする東西2.5㎞の独立丘陵によって画され、同時にこの丘陵によって和歌浦に面した市街地と区切られている。

遺跡の北側を貫流する亀の川は延長14㎞の小河川で、新川とも称されるように現在の流路が確立されたのは江戸時代の大規模な改修工事がなされて以後のことで旧流路は東本渡の南裾から蛇行しつつ山崎山の北東裾に向けて流れていたものと考えられている。なお、現地形は大部分が水田もしくは畑地となっているが、近年市街地の拡張による農地の宅地化や新設高校の建設など遺跡の周辺は急速に開発の手が及びはじめている。



第1図　岡村遺跡位置図

(2) 歴史的環境

前述したように自然地形、水利の便に恵まれた当地周辺は早くより拓け、縄文時代の遺跡として大野中(註4)、鳥居の両遺跡(註5)が知られているほか当岡村遺跡や近接する亀川遺跡からも縄文後～晩期の土器、石器の出土をみている。

弥生時代（Ⅰ様式中段階）に入ると当岡村遺跡で本格的な集落の形成をみ、中期、とりわけⅢ～Ⅳ様式にかけて集落はその規模を飛躍的に拡大し、亀の川流域では最大かつ中心的位置を占めたものと考えられている。またこれと期を同じくして周辺の亀川、大野中遺跡なども活況を呈し後期初頭には高地性集落である滝ケ峰、田鶴原遺跡(註6)の成立をみる。古墳時代５世紀後半から6世紀代にかけては山崎山(註7)をはじめ岡村、岡田八幡神社(註8)などの古墳群が相次いで周辺に形成されており当遺跡の墓域(註9)として直接的な関係が指摘できよう。なおこの時期、本渡付近に「三上屯倉」が設置されたとされており中央政権との係わりの在り方が注目される。

奈良時代の遺跡としては北東 1.5kmの薬勝寺跡(註10)が知られており、また、付近一帯に現在も整然と残る条里制畦畔の施行もこの頃のことと考えられる。平安時代の前期については不明であるが中期以降については文献上からも集落の存続は確認されており、その後は〝垣内集落〟の成立(註11)、そして中世の村落へと歴史の歩みをつづっていったものと思われる。　　（村田）

No.	遺跡名称	遺跡の種類・時代(時期)・備考	No.	遺跡名称	遺跡の種類・時代(時期)・備考
①	岡村遺跡	集落跡・縄文後期～室町・統一的な範囲確認調査	24	鳥居遺跡	散布地・縄文後晩期・縄文土器、石鏃、土偶
2	岡田八幡宮古墳群	円墳４基	25	多田北山古墳群	古墳後期・円墳４基
③	且来Ⅰ遺跡	縄文	26	国主神社古墳群	古墳後期・円墳３基
④	且来Ⅲ遺跡	縄文	27	多田東遺跡	散布地・弥生後期～古墳前期
⑤	且来Ⅱ遺跡	弥生	㉘	滝ケ峰遺跡	集落跡・弥生中期末～後期・高地性集落跡、貝塚、濠
⑥	且来Ⅴ遺跡	弥生、古墳	29	滝ケ峰古墳群	円墳３基
⑦	且来Ⅵ遺跡	古墳	㉚	薬勝寺南山古墳群	古墳後期・円墳４基
8	岡村古墳群	古墳後期・円墳４基	31	仁井辺遺跡	散布地・　土師器、須恵器
9	且来下垣内古墳群	古墳後期・円墳６基	32	薬勝寺跡	寺院跡・奈良～平安
⑩	亀川遺跡	集落跡、墓跡・縄文晩期、弥生中期～古墳前期	33	薬勝寺遺跡	散布地・弥生　・弥生土器、石斧
⑪	山崎山古墳群	古墳中期～後期・前方後円墳１基、円墳15基	34	松原Ⅰ遺跡	散布地・　土師器、須恵器
⑫	室山古墳群	古墳後期・円墳７基	35	頭陀寺遺跡	散布地・弥生　・寺院跡もある、石鏃、瓦
13	内池遺跡	散布地・縄文　・石鏃、スクレイパー他	36	松原Ⅱ遺跡	散布地・　・土師器、須恵器
14	内池窯跡	窯跡　・古墳～奈良　・窖窯	37	江南遺跡	散布地・　・須恵器、土師器、瓦
15	赤坂大池遺跡	散布地・縄文　・石鏃	38	曽垣田Ⅱ遺跡	散布地　・土師器
16	鰹田池遺跡	散布地・縄文・石鏃、石槍、スクレイパー他	39	薬師谷遺跡	散布地・縄文　・石鏃、縄文土器
17	田鶴原遺跡	散布地　・高地性遺跡(?)、石庖丁	40	曽垣田遺跡	散布地・古墳　・土師器
⑱	大野中遺跡	集落跡・縄文後晩期・弥生前中期（海南高校校庭遺跡を含む）	41	城の前Ⅱ遺跡	散布地　・須恵器、瓦器
⑲	地蔵寺古墳	古墳後期・円墳、横穴式石室、須恵器	42	城の前Ⅰ遺跡	散布地　・土師器
20	海南第２中学校々庭遺跡	散布地・弥生後期～古墳	43	大池遺跡	散布地　・瓦器
㉑	奥の谷古墳	古墳後期・円墳、横穴式石室	44	赤津古墳群	円墳５基
㉒	柿本神社古墳	円墳、横穴式石室	45	冬野遺跡	散布地　・土師器、土師質土器
23	奥の谷遺跡	散布地・奈良～平安・須恵器	46	松原古墳群	・円墳２基

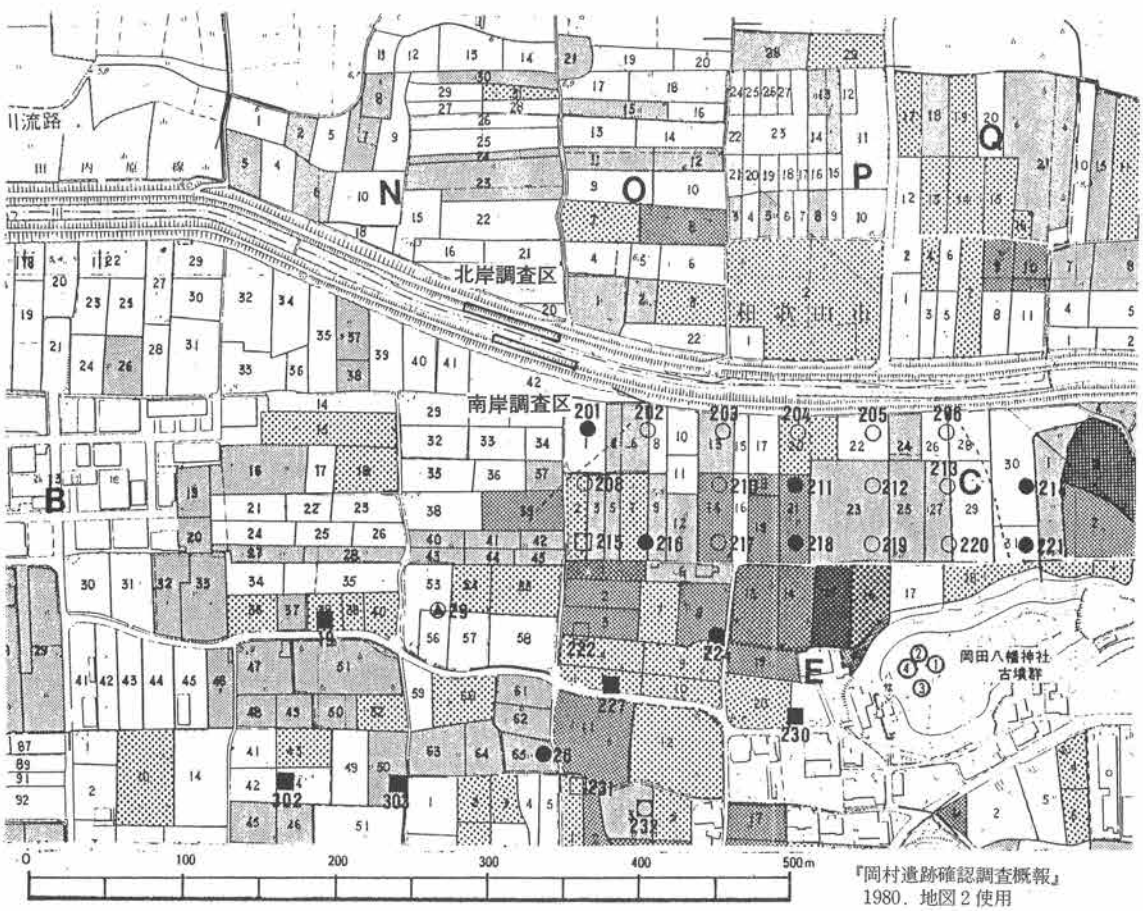
遺　跡　地　名　表

No.○ 印は発掘調査された遺跡。『和歌山県遺跡地名表』　1983年　和歌山県教育委員会
『海南市史』（第三巻 史料編Ⅰ）「考古資料編」　1979年　海南市史編纂室　発行等を参照。

3．調　査　の　概　要

北岸調査区――北岸の発掘調査は、岡村遺跡の北西限に当る地点である。調査の結果、時期不明の土坑を１基検出したのみであった。出土遺物についても縄文土器から中近世の土器、陶磁器片があるものの量も少なく層位的な出土はみられなかった。遺物の中には、亀の川の氾濫によって流されてきたらしくかなり磨滅の著しいものも含まれている。今回の調査地点は、遺跡としては外ずれになり、範囲確認調査の結果の通りとなった。（松田）

南岸調査区――南岸の調査においては、北岸とは対照的に８条の溝を検出した。このうちSD-02は、弥生時代前期に帰属する溝であり、当遺跡において始めて検出された前期の遺構である。また、SD-01よりはほぼ完形のものを含む３点の木製鋤が出土した。この溝は先の調査で検出した大溝につながる可能性も考えられるもので、付近に水田跡の存在する可能性を示すものといえよう。そのほか調査区内において微高地から沼地への地形上の変化を確認した。このことは遺跡の範囲を考える上で貴重な資料となるものである。出土遺物としては、多量の弥生土器をはじめ古墳時代後期の須恵器、土師器、中世の瓦器、土師器、陶磁器類などが出土している。（村田）



『岡村遺跡確認調査概報』
1980．地図２使用

第２図　発掘調査位置図

(1) 北岸調査区 (図版1(2))

① 調　　査

発掘調査は安全対策工事完了後、右岸堤防部分（和歌山市側）で幅員約５ｍ、延長65ｍについて実施したが、排土方法等の問題から東・西に二分し、西半・東半の順に実施した。なお、調査区南側の幅１～1.8ｍは、旧堤防の基礎工事により既に破壊されていた。

〔西半部の調査〕

調査は、既に北側の水田面とほぼ同じ高さまで堀り下げられていたので、これ以下を人力掘削により実施した。

灰色粘土層・灰茶褐色砂泥層にはブロック状に黒色粘土の混入がみられた。この部分は旧堤防築造時に攪乱を受けたものと思われる。検出した遺構はW21付近の土坑のみであった。土坑は長さ0.9ｍ、幅0.4ｍ、深さ0.12ｍという小規模なもので、灰緑色粘土層を切り込んでつくられていた。出土遺物はすべて灰茶褐色砂泥層中から出土したもので、縄文土器、弥生土器、須恵器、土師師器、瓦器のほか石庖丁、天聖元宝等がある。遺構に伴う遺物はなかった。

また、調査区内で２本の杭を検出したが、これは旧堤防建設前の水田に伴うものであったと思われる。

〔東半部の調査〕

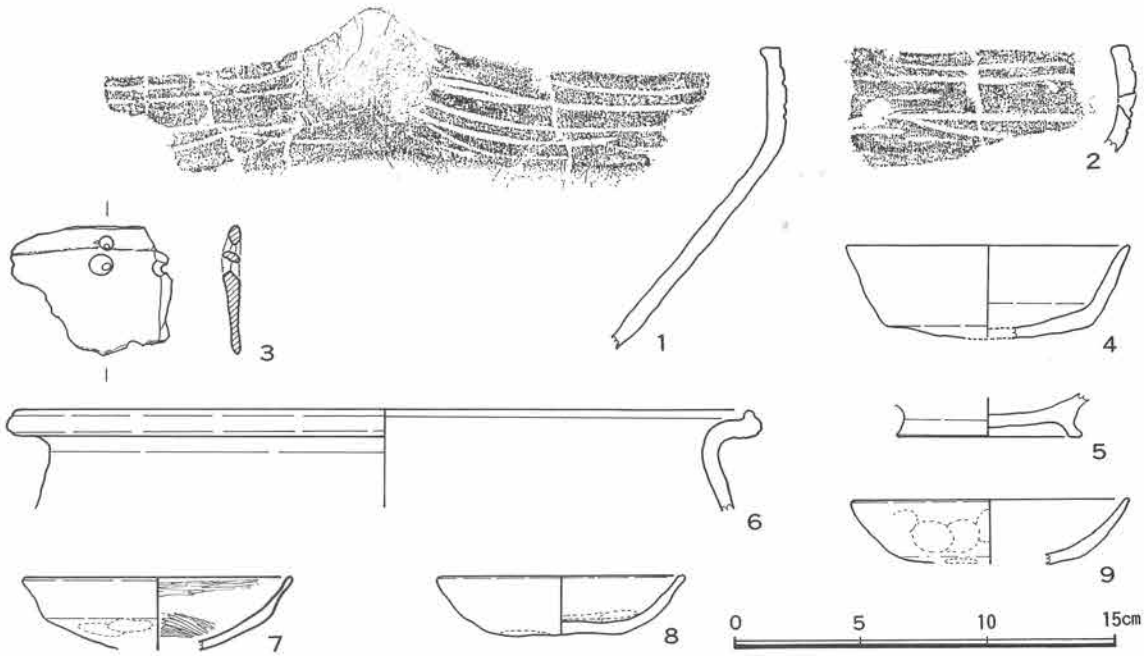
旧水田面より下層約0.7ｍは遺物をほとんど含んでいないため機械掘削により排土を行ない、それ以下を人力掘削により調査を行なった。調査の結果、東端部では砂利や砂層となり、遺構は全く認められなかった。これより下層は粘土層あるいは砂礫層となり、遺構・遺物の存在する可能性が少ないと予想されたので、機械掘削により調査を行なった。

遺物は暗青色粘土層中から縄文土器が比較的まとまって出土した。　　（松田）

② 包含層出土の遺物（第３図）

縄文土器　（１）は波状口縁をもつ浅鉢で、波頂部は４～５ケ所有するものと思われる。口縁部はわずかに内弯しながら上方に立ちあがり、体部との間には稜が入る。内面は丁寧な磨きが施されている。文様は口縁に沿って４～５条の沈線文をめぐらす。波頂部は欠損しているが、沈線の配置傾向より、これらの沈線を波頂部に集結させる構成をとるものと思われる。内面は黒褐色外面は灰褐色を呈し、細かい砂粒を含んだ比較的堅く焼き締ったものである。（２）は（１）と同一個体であると思われる。口縁下２㎝余りのところに外側から小孔を穿つ。焼成後に穿ったものである。晩期初頭の滋賀里式に相当するものであろう。**石庖丁**（３）緑泥片岩製で両端を欠く。孔は４個認められ、２孔を穿ったのち新たに２孔を加えている。これらの孔は両側から穿って貫通させるもので、中には表裏で孔の中心にずれが生じているものもある。**須恵器杯身**（４）高台がなく、底部から上方外側に直線的に立ち上がるもの。淡灰色。田辺編年のＭＴ21に相当する。**黒色土器**（５）底部のみである。内面は炭素が附着し黒色を、外面は淡黄灰色を呈する。黒色土

器A類。内面は中央から外方向にナデがみられる。高台は「八」の字に外方向にひらくもので貼り付け高台である。高台まわりはヨコナデにより仕上げられている。**土鍋**（6）頸部から上を大きく外側に折り、口縁端部を内側に折り返してつまみあげたものである。断面中央は黒色、両端は淡灰黄色を呈する。**瓦器皿**（7）は口縁部のヨコナデが強く、腰部に稜がつく。口縁内側と内面下半に磨きが認められる。内面暗灰色、外面茶褐色。（8）底部内外面に成形時の圧痕が残る。口縁部はヨコナデを施す。黒灰色。（9）外面に成形時の圧痕を残す。口縁はヨコナデを施す。灰色。これらはいずれも瓦器の最終段階のもので、14世紀後半代のものと思われる。　（大岡）

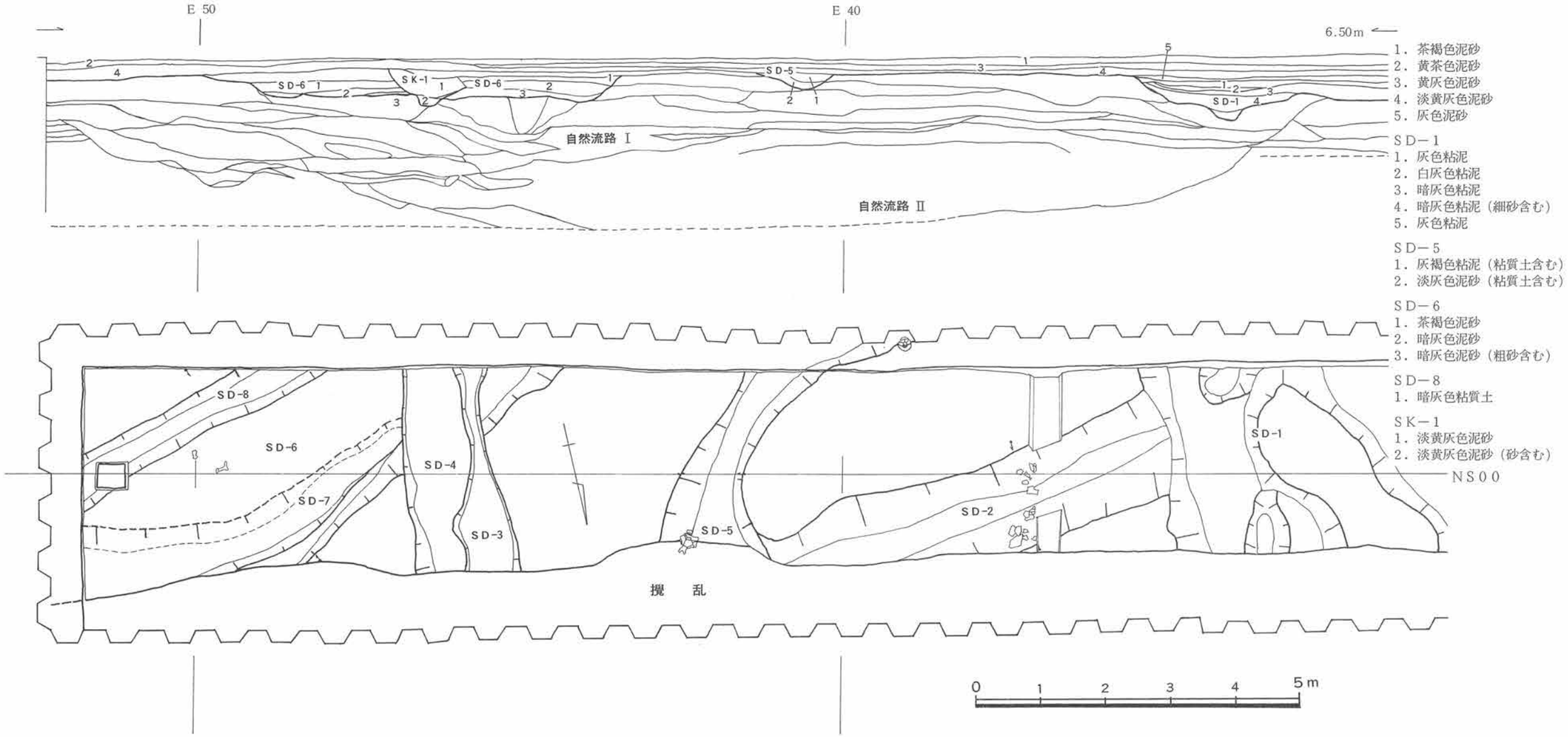


青灰色砂泥―1・2　暗青色粘土―3　黄灰色粘土―4・7
黒色粘土―5・6・9　黒色粘泥―8

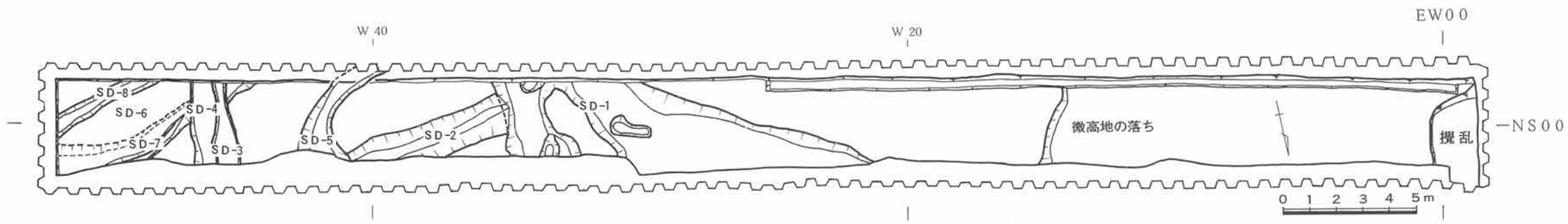
第3図　北岸調査区　包含層出土遺物

(2) 南岸調査区

調査は、昭和57年度調査地区と対称位置にあたる亀の川堤防地内南岸地区を対象とし、幅員5m、延長54mについて実施した。基本的な層序は、茶褐色泥砂、黄灰色泥砂、淡黄灰色泥砂、灰色泥砂となる。上部2層では弥生時代から江戸時代にかけての磨滅した土器、石器が混在しており、下部2層では弥生時代の遺物が主流を占めている。今回検出された遺構の内、SD―1を含む以西では、濃黄色粘泥層を切り込んで、SD―2を含む以東では、黄灰色細砂および細砂混入の黄灰色粘泥層を切り込んで掘削されている。遺構として調査区東半において8条の溝を検出し、西半部では微高地地形から沼地へと変化するいわゆる弥生時代の集落の北西限を検出することができた。8条の溝は出土遺物からみて、SD―2は弥生時代前期（Ⅰ様式新段階）、SD―1・5・6・7・8は弥生時代中期（Ⅲ様式新段階からⅣ様式古段階）、SD―3・4は鎌倉・室町時代に属するものである。　（土井）



第5図　南岸調査区　東半　遺構図



第6図　南岸調査区　遺構全体図

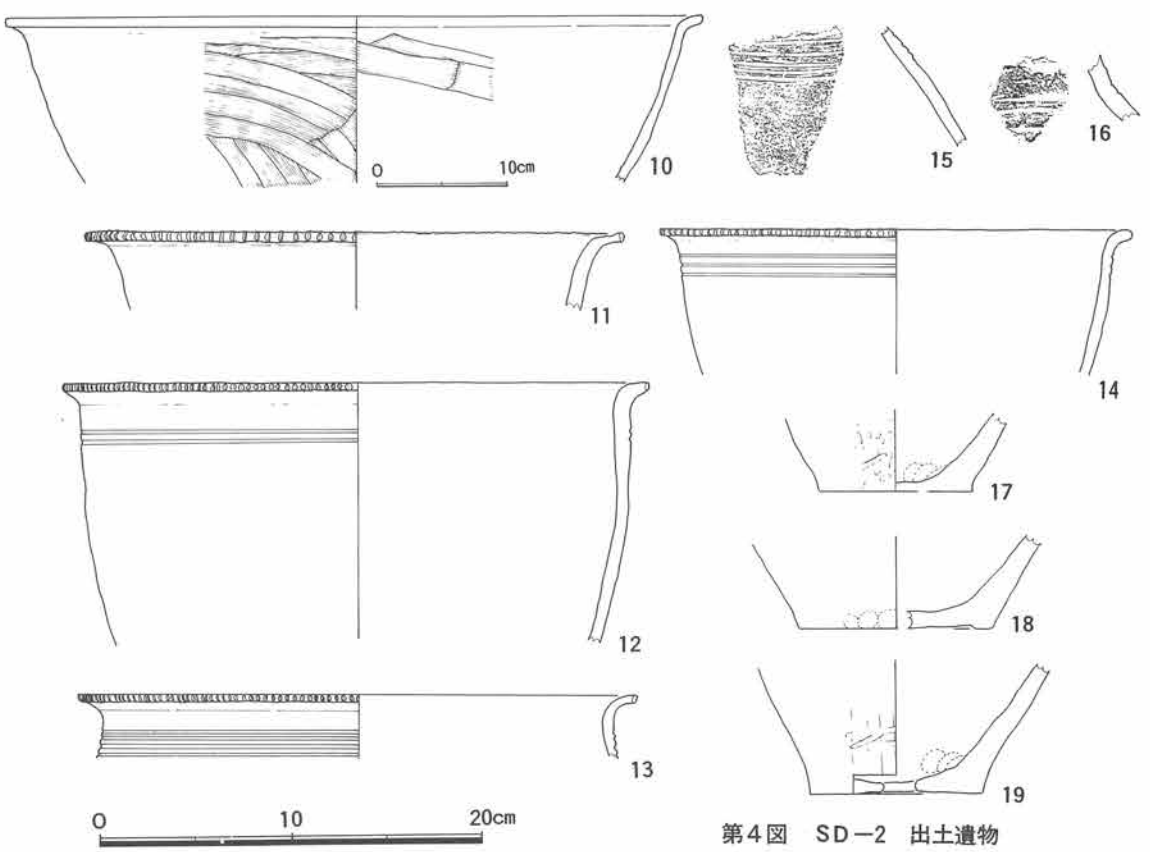
① **溝ＳＤ－２**　（図版３（2)③④、図版４（1））

幅約1.2m、深さ0.4mを測り、延長12mを検出した。方向は、東北東から西南西に至る。層序は、基本的に２層である。上層は、淡灰色細砂に灰色粘泥が混じり壺・甕の小破片が散在するのに対し、下層は、暗灰色粘泥に細砂が混じり、甕の大振りの破片が折り重なるような状況で出土している。

出土遺物　（第４図、図版８）

鉢（10）は、著しく外反する口縁部を有し、内外面共に細いハケ目により仕上げられる。淡茶灰色を呈し、外面全体にススが付着する。胎土は他の器種より緻密である。**甕**　（11）～（14）があり、口縁端部に刻み目が施される。口縁下には、２条から４条のヘラ描き沈線を施すものと、全く施さないものがある。内外面共に、指ナデ、指押えによって丁寧な整形を行ない、その後、ハケ目の不明瞭な工具により調整を行うのを常とする。（12、13）などの外面に、薄くススが付着する。**壺**　（15・16・71・72）があり、削り出し状の突帯を施すものと、４条から６条の多条沈線を施すものがある。外面は丁寧なヘラミガキを行うのを常とする。**底部**　（17～19・75～77）があり、（19）は焼成前に径約1.5cmの孔を穿つ。（75～77）は、胎土に角閃石を含み、茶褐色～暗褐色を呈する生駒西麓産の胎土のものである。

ＳＤ－２の土器は、Ｉ様式中段階の新しい様相を認めるもの（16）と、新段階のものとの共伴例として捉えることができ、上層出土の土器についてもさほどの時期差は認められない。（土井）



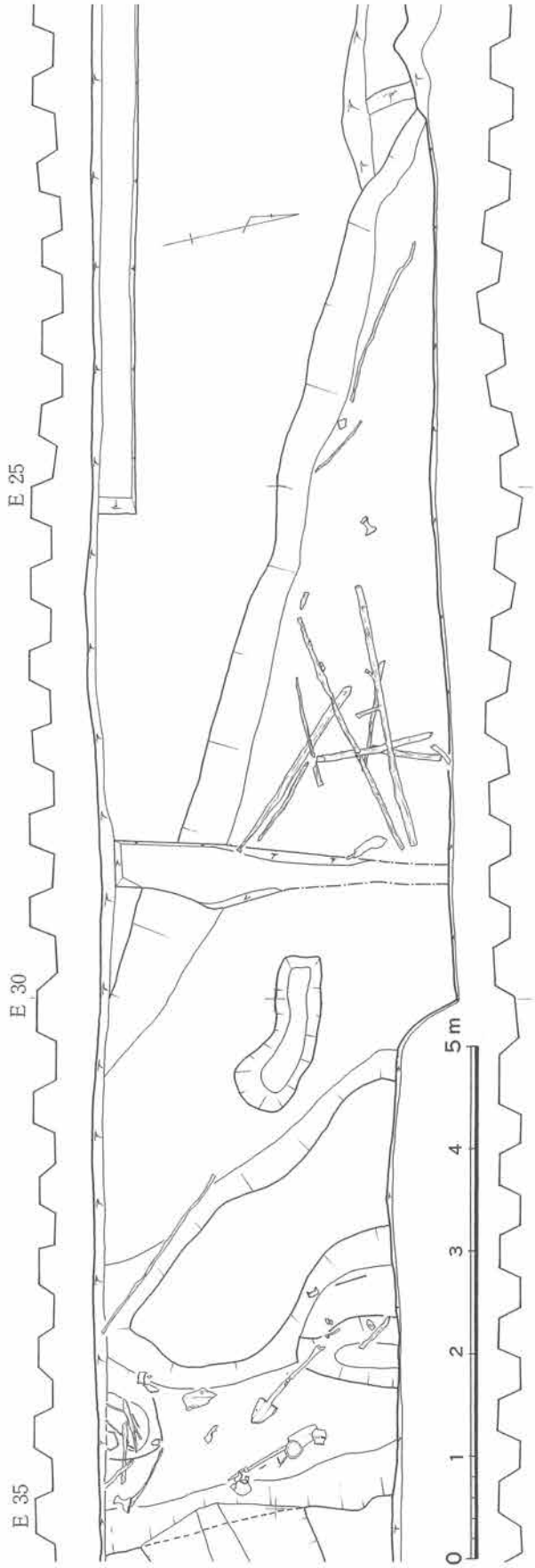
第４図　ＳＤ－２　出土遺物

② 溝ＳＤ－１　（図版２(2)・図版(1)(2)①②）

検出した溝のうち最大の規模を有し、幅約５ｍから８ｍ、深さ0.4～0.6mを測り、延長12mを検出した。方向は、南から北へ至る流れと、東南東から西北西に至る流れがある。層序は、基本的に５層である。上部２層には、やや新しい時期の遺物も含まれるが、下部３層にはＳＤ－１の時期の遺物が含まれている。出土遺物として、溝が機能していた初期の時点で埋没したとみられる木製鋤（29）、ＳＤ－２の遺存遺物とみられるⅠ様式新段階の壺上部（26・27）と、溝に土砂が堆積しかけた頃に埋没したとみられる壺（20～22）、甕（25）、高杯（23、24）木製鋤（28、30）、網代、杭材（31）、断面楕円形木（32）、自然木などがある。溝の中央部が中州状になるため流れが変化していたものとみられる。

出土遺物　土器（第８図・図版９）

壺　（20・21）は、同一個体と考えられる。外面は、粗いハケ目を行なった後体部中位から下半にかけて二方向のヘラミガキを行なう。体部上位には、焼成後外面から穿孔を行なっている。下半全体にススが付着する。（22）は、体部中位が張り出すもので、４帯の櫛描き直線文と１帯の櫛描き波状文で文様帯を構成している。下半部に径10cm大の黒斑が認められる。**甕**　（25）は、小型の甕で、頸部以下を細いハケ目で整えた後、下半部

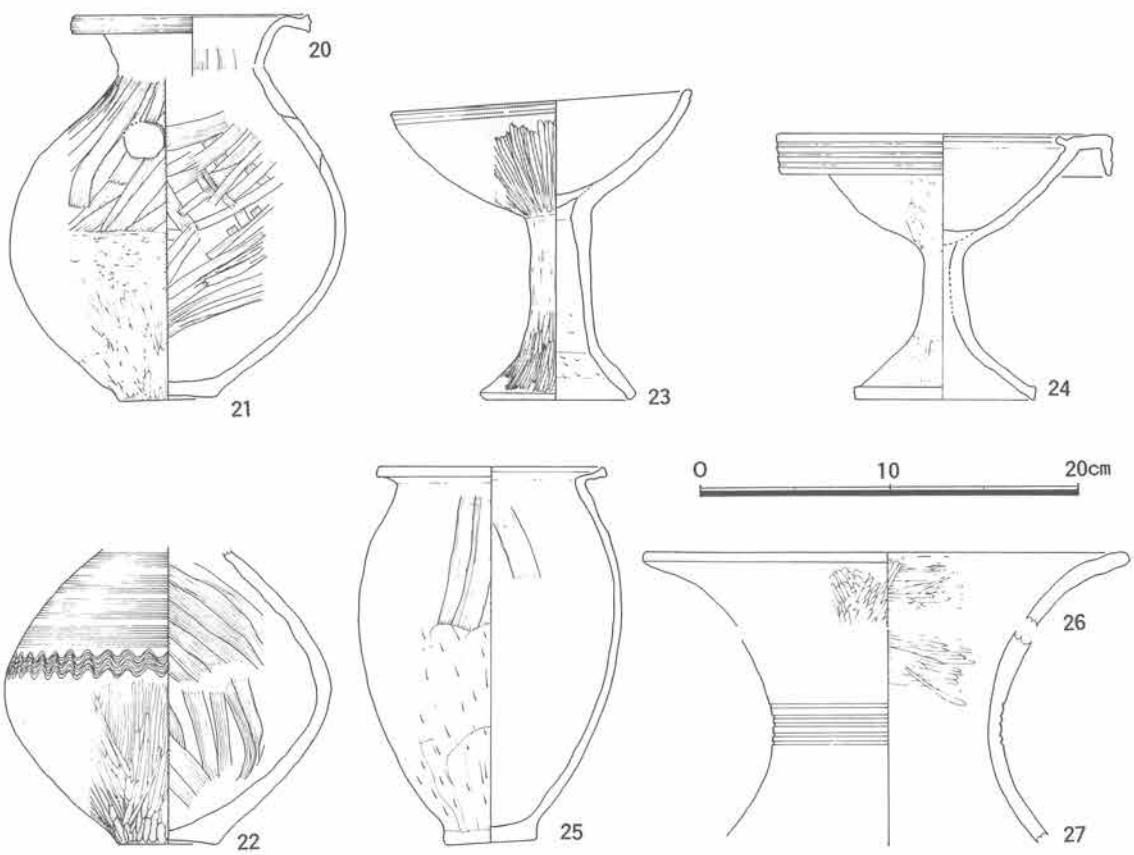


第７図　ＳＤ-1　遺物出土状況

にヘラ削りを行なう。内面上半は、粗いハケ目の痕跡が認められる。器面の大半に、ススが薄く付着している。**高杯**　(23) は、椀形の杯部を有し、口縁端部に浅い凹線を１条施す。脚台部内面は、ヘラによるケズリ取りを行なう。杯部と脚柱部の接合は、円盤充填を行なう。杯部と脚台部の同一側に各１ケ所の黒斑を認める。(24) は、椀形の杯部に外方に垂下させる口縁部を有し、垂下面に浅い凹線文を３条施す。色調は、淡桃褐色を呈し、胎土は比較的緻密である。ＳＤ－１出土の土器は、後述するＳＤ－５出土の土器に較べ、小形のものが多く、凹線文の使用が少ない。(26・27) などの前期の土器は、ＳＤ－２に埋没していたものであろう。

木器（第９図・図版12）

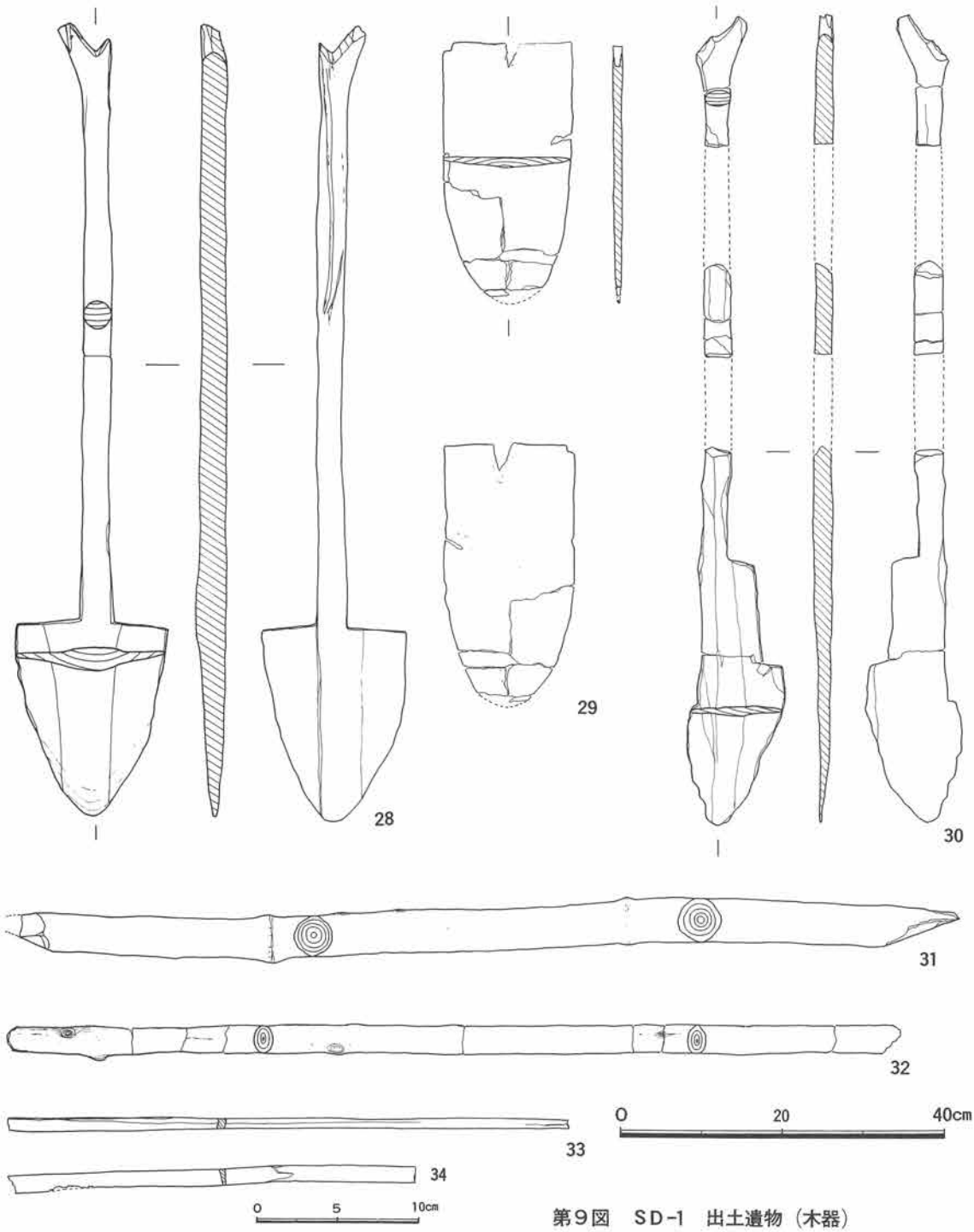
鋤 (28) は、ほぼ完存に近いもので、木芯に近い部分を縦木取りに使用している。身部は、長さ24cm、幅18cm、厚さ３cmを測り三角形状を呈し、凸面の著しい方の両端には反り返りがみられる。一部に幅２cm程の加工痕を認めるが、図化できるほどのものでない。柄部は、径約3.4cmの断面円形を呈す把手の内面は、鋭い工具による加工痕が認められる。材種はアカガシと考えられる。(29) は、遺存が悪く、身部の長さ32cm、幅16cmを測り砲弾形を呈する。(30) も、やせ細りの著しい (29) と同様の寸法を測る。柄部は、断面楕円形を呈すが、やせ細りのためであろうか。(28・30) の把手は、現代のスコップと同様の逆三角形の形状を呈するものであろう。



第８図　ＳＤ-1　出土遺物（土器）

杭材　全長118cm、径５cmを測り、片端に５単位の加工痕がある。材種はナラ科に属する。

その他　(32) は、断面楕円形を呈すが、遺存内では加工痕が認められない。(33) は、断面方形を呈するもの、(34) は、板状を呈するもので用途不明。網代（図版３(2)①）は、単子葉植物を使用したもので、編み方が不揃いである。　（土井）



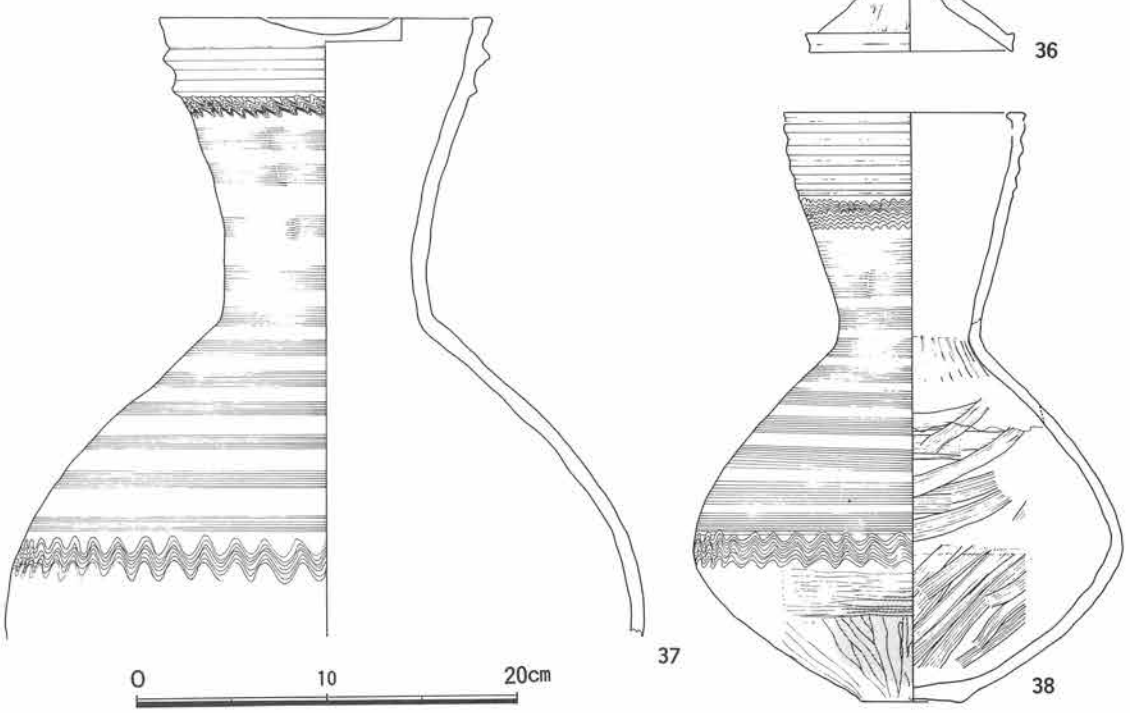
第９図　ＳＤ-1　出土遺物（木器）

③ **溝ＳＤ－５**　（図版４(2)）

幅約0.8mから1.2m、深さ0.5mを測り、延長5mを検出した。方向は、南西から大きく北北東にふるものである。層序は、基本的に２層である。下層は、淡灰色泥砂に粘泥が混じり、完形土器が出土している。出土遺物として、直口壺（38）、脚台付細頸壺（36）、大形の直口壺（37）の上半部があるにとどまるが、出土状況が他の溝と若干異なり完形品が単独で出土する。

出土遺物　（第10図）

脚台付細頸壺　（36）は、八の字状に開く脚台部を有し、体部は体部下位で著しく張り出す算盤玉状を呈する。口縁端部には、１条の浅い凹線文を施す。体部と脚台部の接合は円盤充填による。体部内面は、指押え、指ナデの後、ハケ目の細い調整を行う。色調は、淡桃褐色を呈し、緻密な胎土である。**直口壺**（37）は、口縁部が外傾ぎみに直立し、片口状になる。口縁上位に断面三角形の貼付突帯を２条付す。櫛描による文様帯は、突帯直下に１帯の波状文を配し、頸部から体部にかけて11帯の直線文を配し、再び波状文を配す構成をとる。色調は、淡黄灰色。胎土はまま緻密である。（38）は体部下位で緩やかに張り出す体部。口縁上位に、５条の凹線文を施し、以下は（37）と同様の文様構成をとる。体部下位に径10cm程の黒斑が認められる。　（土井）



第10図　ＳＤ-5　出土遺物

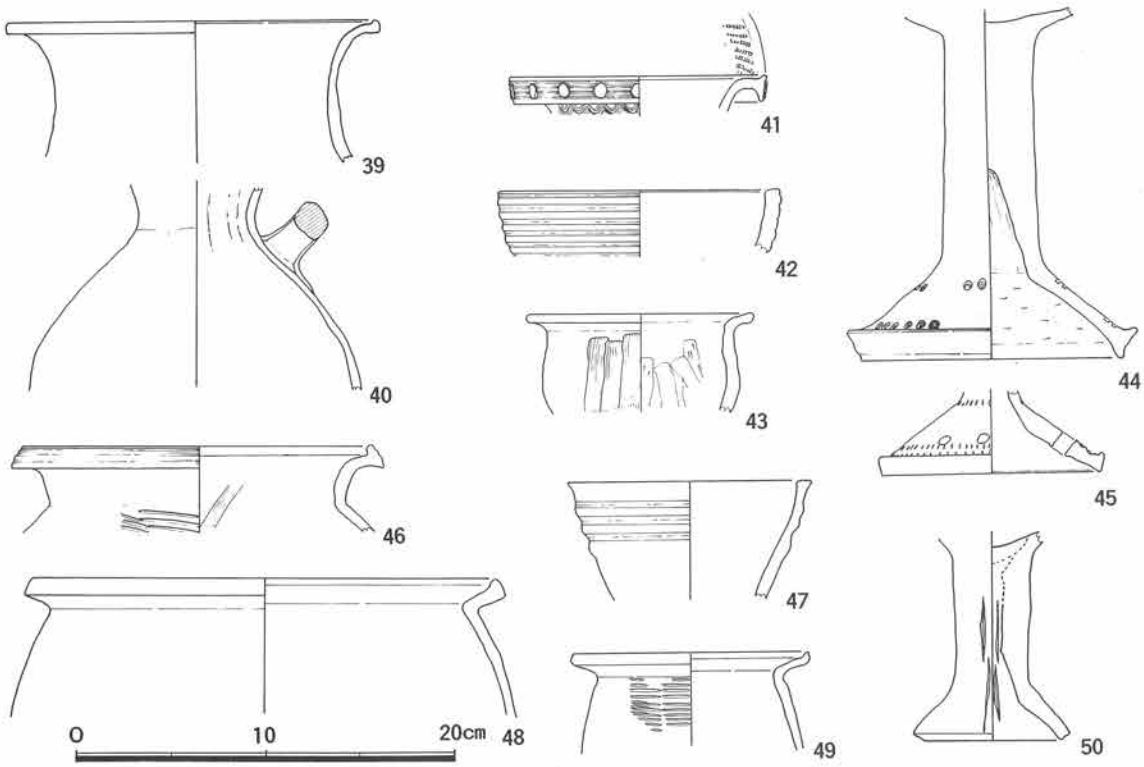
④ 溝ＳＤ－６・７・８　（図版５）

名々、ＳＤ－７は幅約１ｍ、深さ0.1ｍを測り、延長8ｍ、ＳＤ－６は幅約2.8ｍ、深さ0.25ｍを測り、延長6.5ｍ、ＳＤ－８は幅0.7ｍ、深さ0.15ｍを測り、延長4ｍを検出した。ＳＤ－６は、ＳＤ－７掘削のため削平されている。これら３条の溝の流れの方向は同一で、東北東から西南西に至るものであり、ほぼ平行している。新旧関係では、主に土層観察より、ＳＤ－８が最も古く、次いでＳＤ－６、最後にＳＤ－７となる。出土遺物は、主にＳＤ－６の粗砂混じり暗灰色泥砂より多量の炭化材と共に把手付壺（40）、高杯脚台部（44）などの大振りの破片が多量に出土している。

出土遺物（第11図）

壺　（39）は、頸部の太い古いタイプのものである。（40）は、断面方形状の把手を横位に付せられており、短い口縁部のつく水差型の土器である。（41）は、口縁端面に浅い凹線文を施した後、円形貼付浮文を付す。内面には、粗い櫛描列点文を施す。**甕**　（43）は、小形の甕で(39)などと同時期に属するものである。色調は、淡黄褐色～淡茶褐色を呈し、胎土はやや粗い。**高杯**（44）は、中実の脚柱部を有し、脚台部に竹管文を上下に配す。色調は桃茶色を呈す。脚台部に径10㎝の黒斑を認める。（45）は、内面をナデで仕上げる。外面に、ヘラによる列点文を上下２段に配す。色調は、稀れな淡茶色～淡茶黄色。**鉢**　（42）は、６条の狭い凹線文を施す。

ＳＤ－７出土　**甕**　（46）は、中形で口縁端面に凹線文を施す。（49）は、小形の甕である。**高**

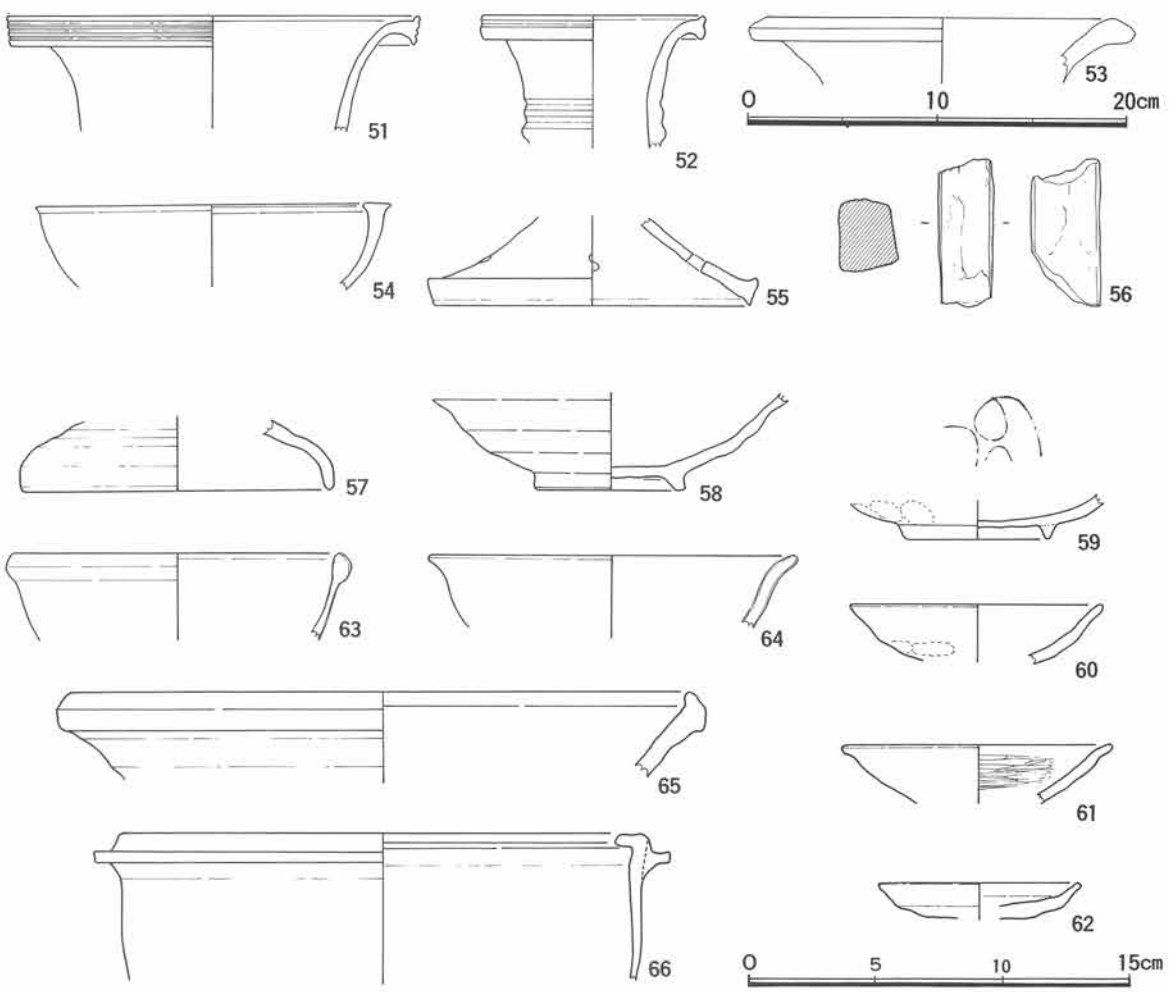


ＳＤ６－39～45，ＳＤ７－46～50　　第11図　ＳＤ-6/ＳＤ-7 出土遺物

杯　(50) は、成形時の素地の合せ目がそのまま亀裂を生じている。　(土井)

⑤　包含層出土の遺物

弥生土器　(52) は、頸部下位に太い凹線文を施すのを特徴とする広口壺で、体部上半に櫛描による文様帯を施す類のものである。(53) は、類の少ない広口壺で、Ⅱ様式に属する可能性がある。(54) は、無文の鉢で、強い横ナデによって口縁端部が肥厚する。**石器**　(56) は、両端を欠く柱状石斧。石材は、キメの細かい片岩を使用している。**須恵器**　(57) は、灰白色を呈しバサつく胎土である。その他、杯身、杯蓋、壺、甕などの細片がある。**黒色土器**　(58) は、内面に炭素を吸着させたA類に属するもの。**瓦器**　椀 (59) は、見込みに3回転以上の連結輪状の暗文、内面側壁に幅の狭いミガキを行なう。(60・61) は、直径10cm前後で、口縁部の横ナデの強い高台のつかない類のものである。皿 (62) は、口縁部に強い横ナデを行なう。底部外面は指ナデのみによる。非常に堅緻。**土師器**　土鍋 (66) は、口縁端部を内側に折り返し、外面に低い鍔を付したもので、大和型に属するものである。**須恵質こね鉢**　(65) は、口縁端部を内外に肥



黄茶褐色泥砂―51～56・59　灰色泥砂―57・58・66
淡黄灰色泥砂―60・61・63・64　灰色粘泥―62 灰色砂礫―65

第12図　南岸調査区　包含層出土遺物

厚させた、東播系の製品と考えられる。**中国製磁器**　白磁（63）は、口縁部が玉縁状になる碗で内外面に均一な施釉がなされている。青磁（64）は、口縁部端外りの無文の碗である。胎土の一部が赤茶色を呈する。内外面ともに細かい貫入がみられる。その他、瓦質の甕、天目茶碗がある。

（土井）

⑥　その他

微高地の北西限　（図版6(1)(2)①）

調査区の西半（E15付近）において、包含層灰色泥砂層が急勾配で下降し、E５付近では厚さ約20cmの堆積を認め、西の方ほど厚さを減じ、EWO～W１付近では約５cm前後の堆積となる。と同様に、遺構のベースとなっている濃黄色粘泥層も下降する。この包含層等の急激な落ちを、延長約４mに渡り検出することができた。また、微高地外において図版6(2)①②に見るような杭列を検出したが、打ち込み面を明確にできなかった。

自然流路　（第５図　図版7(1)(3)①②）

調査区東半において暗灰色粘泥をベースとして流れる自然流路を２条認める。自然流路Ⅰは、灰色粘泥、灰色粗砂などが互層に堆積し、湧水が著しい。幅10m～16m、深さ約0.6mを測り、流路底一面に自然木、木の葉（主に広葉樹）等が厚く堆積して、異常な様相を呈する。出土遺物は、木の葉層より無文の縄文土器１片、梅の種１点のみの出土である。自然流路Ⅱは、Ⅰと同様の互層を成し、西半部約20mにわたり検出したにとどまる。完掘していないが、深さ２m以上の流路である。遺物は皆無で、時期は不明である。

西半の灰色粘泥層　（図版７ (2)③）

調査区西半の濃黄色粘泥層を全て除去した状態で、地表下約３m以上の灰色粘泥、暗灰色粘泥の互層が続く。深さ約３m付近まで掘削した結果、幹回り３m以上の巨根を確認した。巨根は、四方八方に複雑な広がりをみせる。遺物は、風化の極めて著しいサヌカイトの剝片１点である。剝片は、横長のもので、灰白色を呈し、剝離の際の鋭さがなく丸みをおびた物になっている。所属時期を明確にできなかった。

（土井）

４．ま　と　め

岡村遺跡については過去二度にわたる確認調査が実施されており、その結果、遺跡の範囲、集落の変遷消長の一端が明らかにされ、遺跡のアウトラインがほぼ呈示されるに至っている。

今次の調査もこれらの成果を受け、参考にしつつ実施したわけであるが調査結果は出土遺物の傾向、遺構のあり方等、おおむねこれらの成果に沿うものであった。このことは先の確認調査の正確さを追認し補強すると同時に遺跡の実像へより近づく一助となり得たものと考える。

以下、今次の調査で得た新たな所見を述べ今後の問題提起と共にまとめにかえたい。

(1)　出 土 遺 物

今次の調査で得られた出土遺物は、縄文時代から室町時代に至るものである。その内、特に、

弥生時代の土器がまとまって出土している。調査面積、資料数が限られるため遺物の変遷を捉えることはできないが、2・3問題点を抽出しておきたい。

溝ＳＤ－２の遺物は、上層・下層ともにⅠ様式以外の遺物を含まない一括資料と考えられる。殆んどがⅠ様式新段階の壺・甕・鉢であるが、壺（16）の幅の広い削り出し突帯のものが出土している。即、これを共伴資料として扱うのは難かしいが、その可能性のあるものとして指摘しておきたい。

最も出土資料の多いのが、弥生時代中期のⅢ様式新段階からⅣ様式古段階の土器であるが、遺構毎に一括した中で、これらを分離することはできない。中には、溝ＳＤ－５出土の口縁部上半に断面三角形の貼付突帯を付す直口壺（37）と、凹線文と櫛描文の併用される直口壺（38）などの共伴は、凹線文を多用する時期の特徴を示す例と考えられる。また、溝ＳＤ－６に切られる溝ＳＤ－８からは、頸部の下半に貼付突帯を付すタイプの直口壺が出土している。直口壺（37）などより古相の物で、Ⅲ様式でも古い段階に属するものであろう。

木器では、溝ＳＤ－１より木製鋤３点が出土したことにより既往の調査分を加えて計13点となる。これら13点の木製鋤は、身部の形態により、身部が30cm前後のもの９点、50cm以上のもの３点、25cm以下で三角形状を呈するもの１点に大別できる。これらの身部の形態の違いは、それぞれの機能によって生じたものと考えられる。（土井）

(2) 検 出 遺 構

今次の調査の最大の成果としては、弥生前期に遡る遺構（ＳＤ－2）を検出したことがあげられよう。本遺跡では従来より前期の遺物はいくつか認められていたが集落形成の具体的な例証としての遺構の検出はなく課題とされていたものである。また、この遺跡が中期段階の遺跡の北西限と考えられる地区で検出されたことは、前期の集落範囲が当初推定されていた範囲よりさらに広がることを示すものであり、その意味でも今回の前期遺構の検出のもつ意味は大きいといえよう。なお中期以降の遺跡の範囲についていえば、今回の調査区がほぼその北西限にあたるものと推定されていたが、南岸調査区において微高地から沼地への地形上の変化を確認しており、またこの地点の北東にあたる北岸の調査においては遺物、遺構ともきわめて少なく明瞭な差異が認められることより当地区をもって遺跡の北西限とすることが妥当と考える。

木製鋤３点が出土した溝ＳＤ－１は、昭和53年度確認調査の201・211グリッドで検出された大溝につながる一支流と考えられ、その規模も大きく、遺跡内での生産基盤に通じる幹線流路としての機能を担っていたものと思われる。（村田）

(3) 遺跡の動向

最後に遺跡の動向についてふれておきたい。今次の調査では弥生時代後期から古墳時代初頭にかけての遺物が全く認められない。先に行なわれた確認調査においてもこの傾向は指摘されており、この時期に遺跡の急激な縮小、もしくは他地点への移動を想定せざるをえない状況にあるといえる。土器製作技術上の画期であり、石器の消滅と鉄器の普及が言われるなど弥生時代を通し

て最も大きな画期が設定されるⅣ様式からⅤ様式にかけてのこの時期に照応して遺跡にこのような動向が看取されることは重要な意味をもつものといえよう。

このような動向――河川の中心地に位置し前期から続く集落（拠点集落）がこの時期に集落立地を変える――は、すでに先学より指摘されているように本遺跡のみに見られる個別的な現象ではなく、県内の各水系、他地域においても一様に見られる普遍的な現象であり、主として政治、社会的動向、高地性集落の出現の問題とからめて論じられているところでもある。県内でも最近このような観点から、有田郡吉備町田殿・尾中遺跡の発掘調査に伴い、有田川水系の遺跡群の動向として詳細かつ意欲的な論及がなされている。(註12) 翻って本遺跡を含む亀の川水系についていえば、現段階では詳細に論及するに足る知見を得ていないが、当面、拠点集落と目される岡村遺跡、高地性集落である滝ケ峰遺跡、さらに後期にその中心をみる亀川遺跡の三遺跡の相互の関係が注目に値しよう。

なお、岡村遺跡においては亀の川改修工事の進展に伴い、今後も随時調査が予定されており、さらに遺跡の全体像解明に期待がもたれるところであるが、その際、遺跡自体の解明――弥生時代の墓域や水田跡等の確認作業とともに亀の川水系における遺跡の動向といった幅広い視野と問題意識に立脚した調査が望まれるものである。（村田）

（註１）　萩本　勝『岡村遺跡確認調査概報』　1980年　海南市教育委員会・海南市文化財調査研究会

（註２）　萩本　勝『岡田八幡宮周辺遺跡群調査概報』　1981年　海南市教育委員会・海南市文化財調査研究会

（註３）　遺物の散布密度については　（註１）の地図２　遺物散布密度図に拠る処が大である。

（註４）　吉田宣夫「大野中遺跡」　（『近畿自動車道和歌山線埋蔵文化財調査報告書』）　1972年　和歌山県教育委員会・日本道路公団大阪支社

（註５）　中村貞史「海南市鳥居遺跡出土の縄文時代遺物について」　（『紀伊風土記の丘年報』 第４号）　1977年　和歌山県立紀伊風土記の丘管理事務所

（註６）　植田法彦・中尾憲市　『亀川遺跡発掘調査概報』　1978年　海南市教育委員会
中尾憲市　『亀川遺跡第Ⅲ・第Ⅳ次発掘調査概報』　1981年　〃　〃

（註７）　笠井保夫ほか　『滝ケ峰遺跡発掘調査概報』　1972年　和歌山県教育委員会

（註８）　「考古資料編」　（『海南市史』第三巻　史料編Ⅰ）　1979年　海南市史編纂室

（註９）　『山崎山古墳群緊急発掘調査報告書』　1978年　和歌山県教育委員会

（註10）　末永雅雄ほか　『岩橋千塚』　1967年　関西大学

（註11）　現岡村集落から且来、下垣内集落にかけて「中垣」「垣添」「奥垣内」「下垣内」の呼称を認める。

（註12）　渋谷高秀ほか　『田殿・尾中遺跡』　1982年　吉備町教育委員会

なお、現場調査、概報作成に当り、諸々の点で（註１）（註２）の文献に拠る処が大である。また、確認調査を担当された萩本勝氏の御助言を得ることができた。記して感謝の意を示したい。

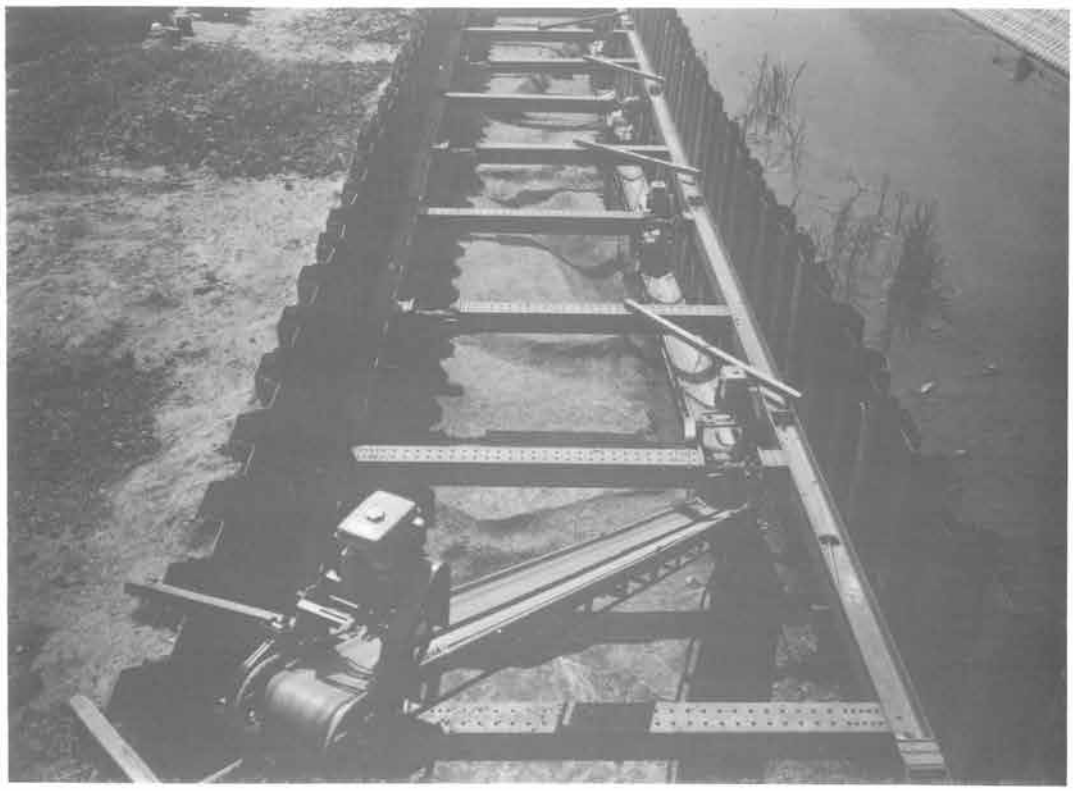
図

版

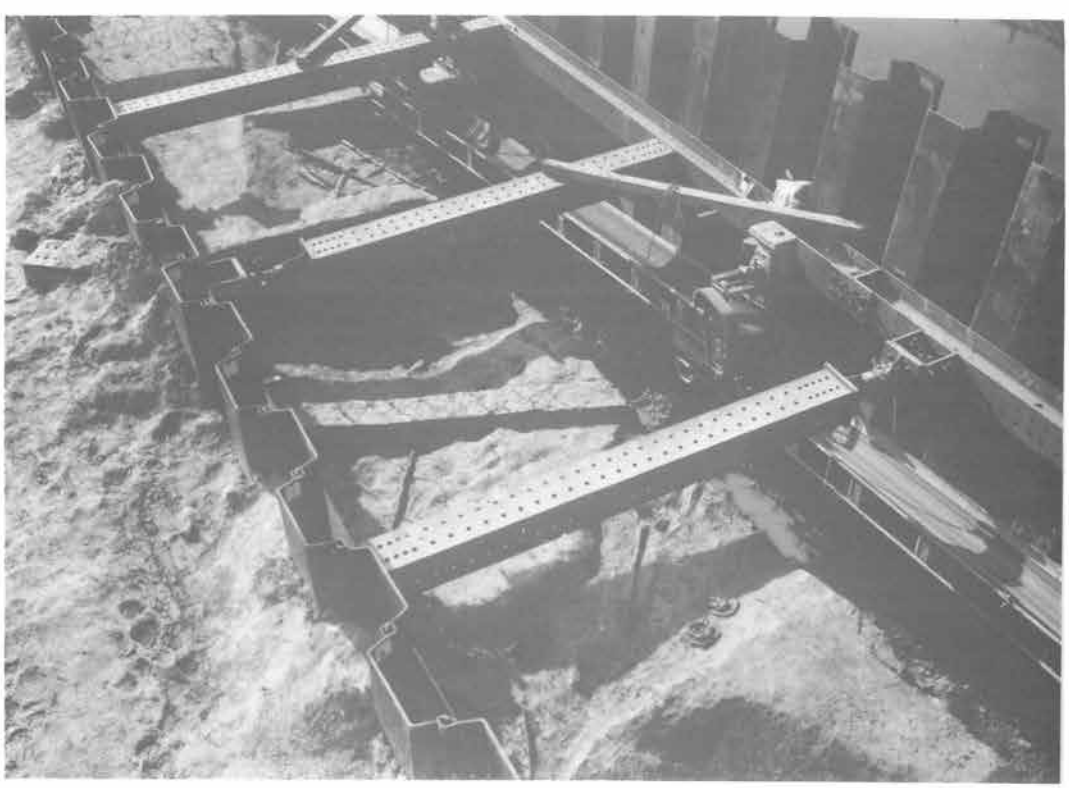
(1) 調査区　遠景（西より）

(2) 北岸調査区　① 全　景（西より）　② 土坑
③ 西　半（東より）　④ 東半落ち込み状地形

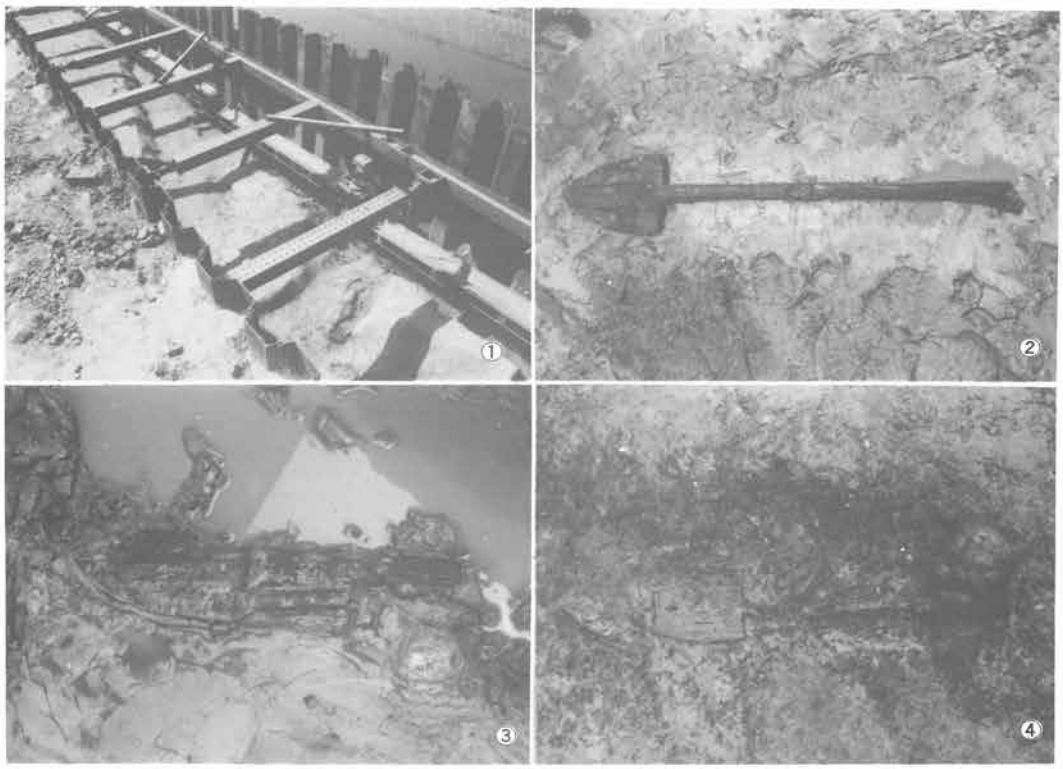
図版 2



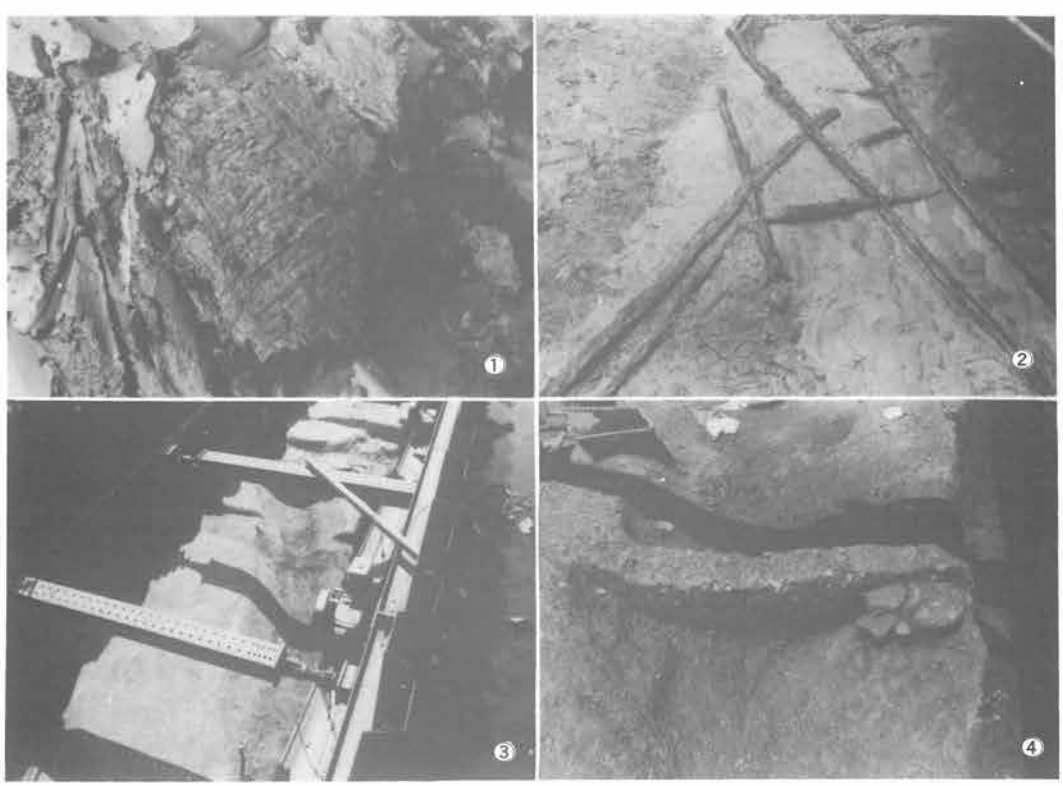
(1) 南岸調査区　全　景　（東より）



(2) ＳＤ－１　遺物出土状況（南東より）



(1) ① ＳＤ－１　全　景　　② ＳＤ－１　遺物出土状況　鋤１
③ ＳＤ－１　遺物出土状況　鋤２　　④ ＳＤ－１　遺物出土状況　鋤３

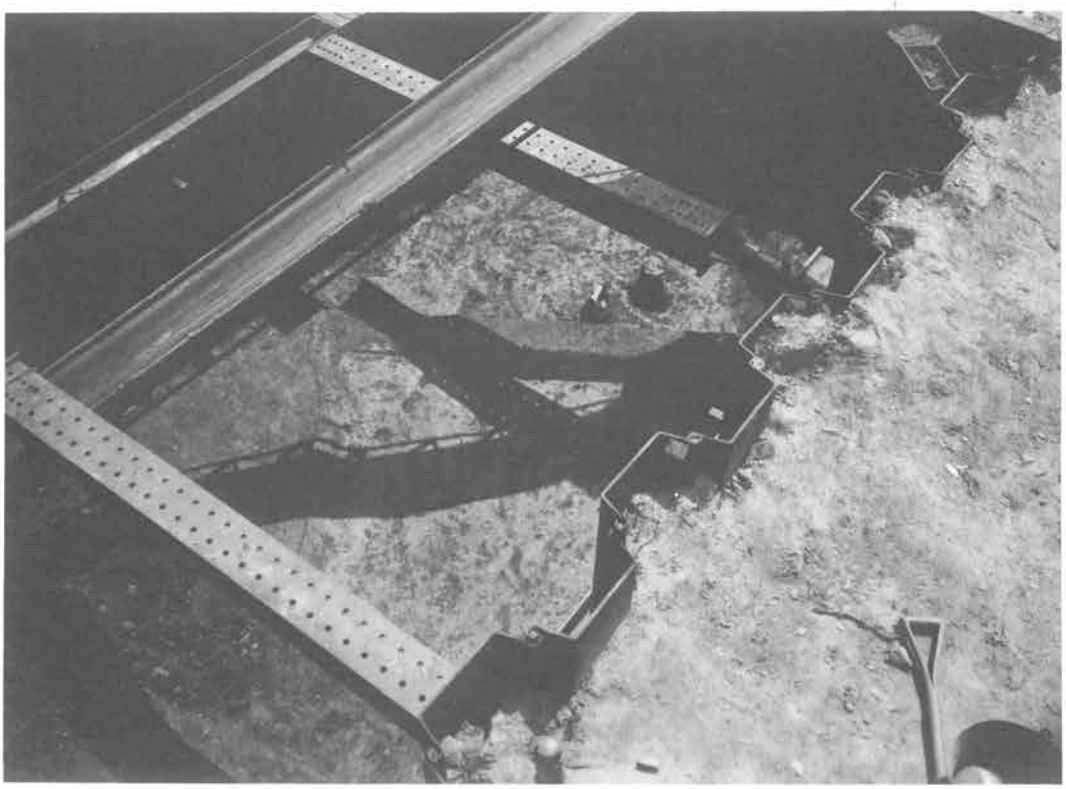


(2) ① ＳＤ－１　遺物出土状況　網代　　② ＳＤ－１　遺物出土状況　自然木
③ ＳＤ－２　全　景　　④ ＳＤ－２　ベルト　土層

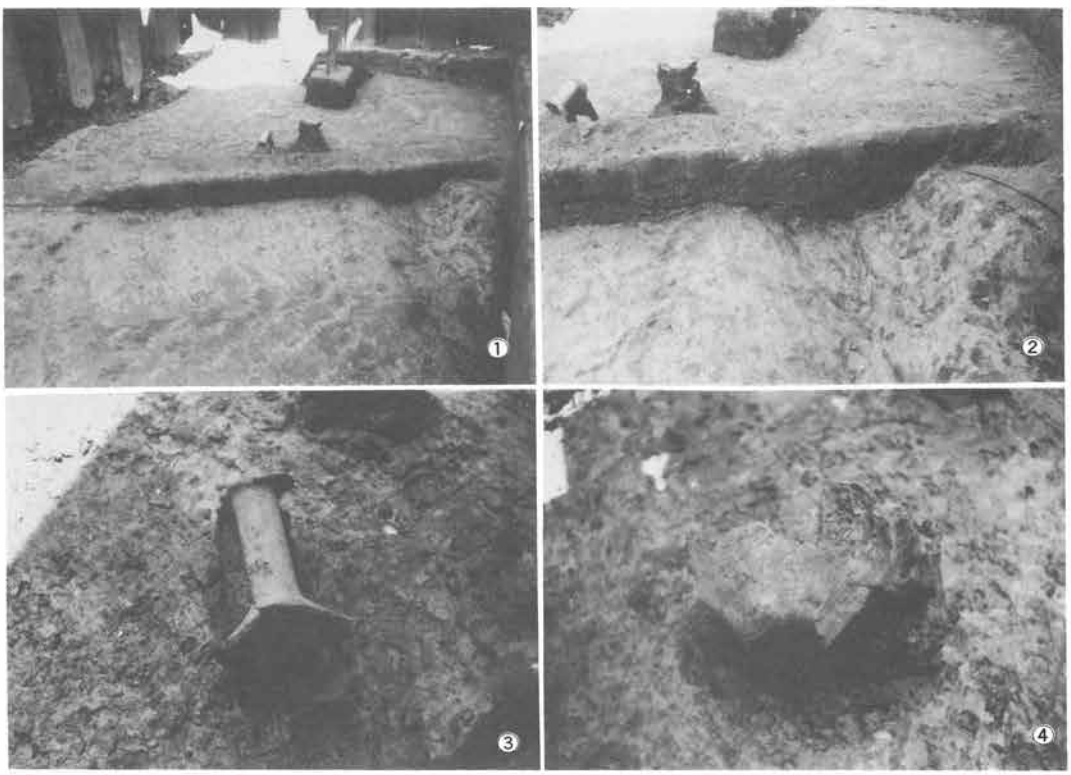
図版 4

(1)　ＳＤ－２　遺物出土状況

(2) ①　ＳＤ－５　完　掘（北より）　②　ＳＤ－５　遺物出土状況
③　ＳＤ－５　断面土層　④　ＳＤ－５　遺物出土状況

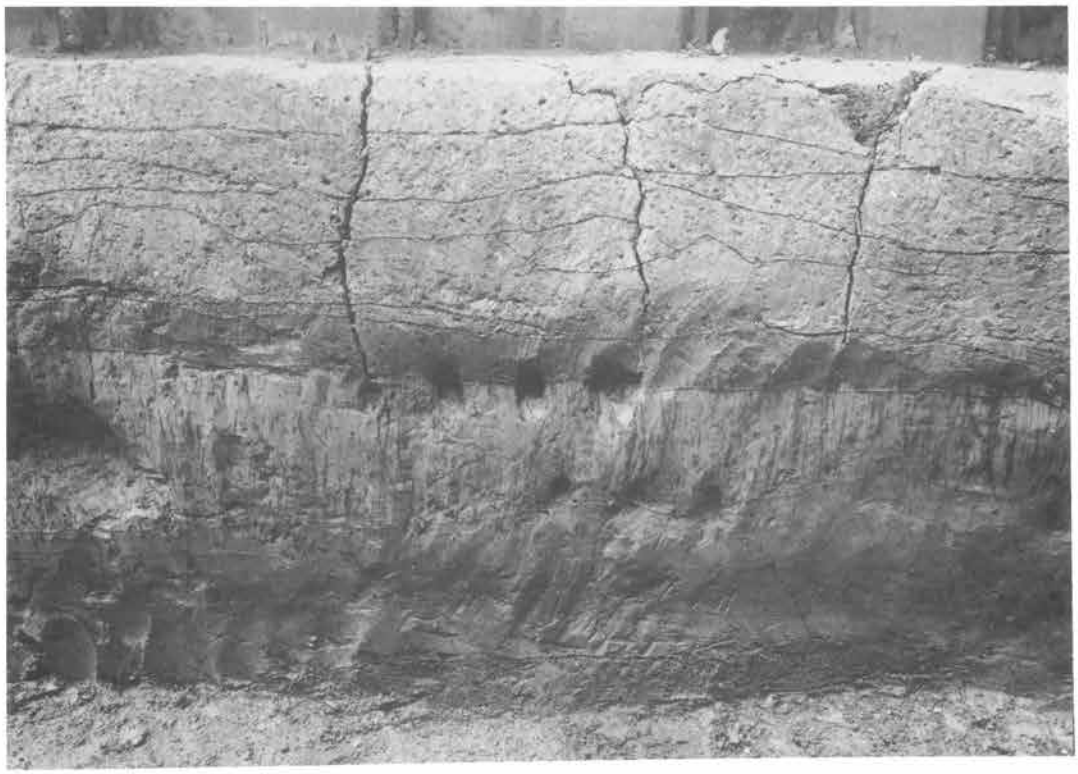


(1) ＳＤ－６．７．８　完掘状況

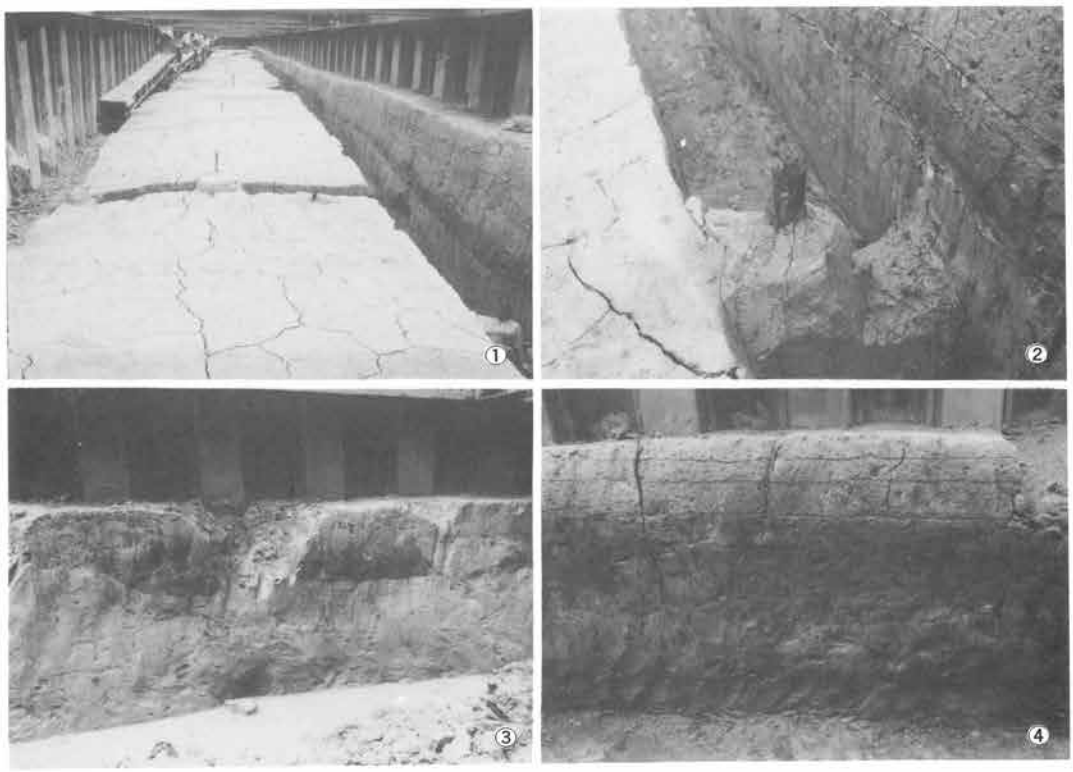


(2) ①　ＳＤ－６・７・８ベルト土層　　②　ＳＤ－８　ベルト土層
③　ＳＤ－６　遺物出土状況　　④　ＳＤ－６　遺物出土状況

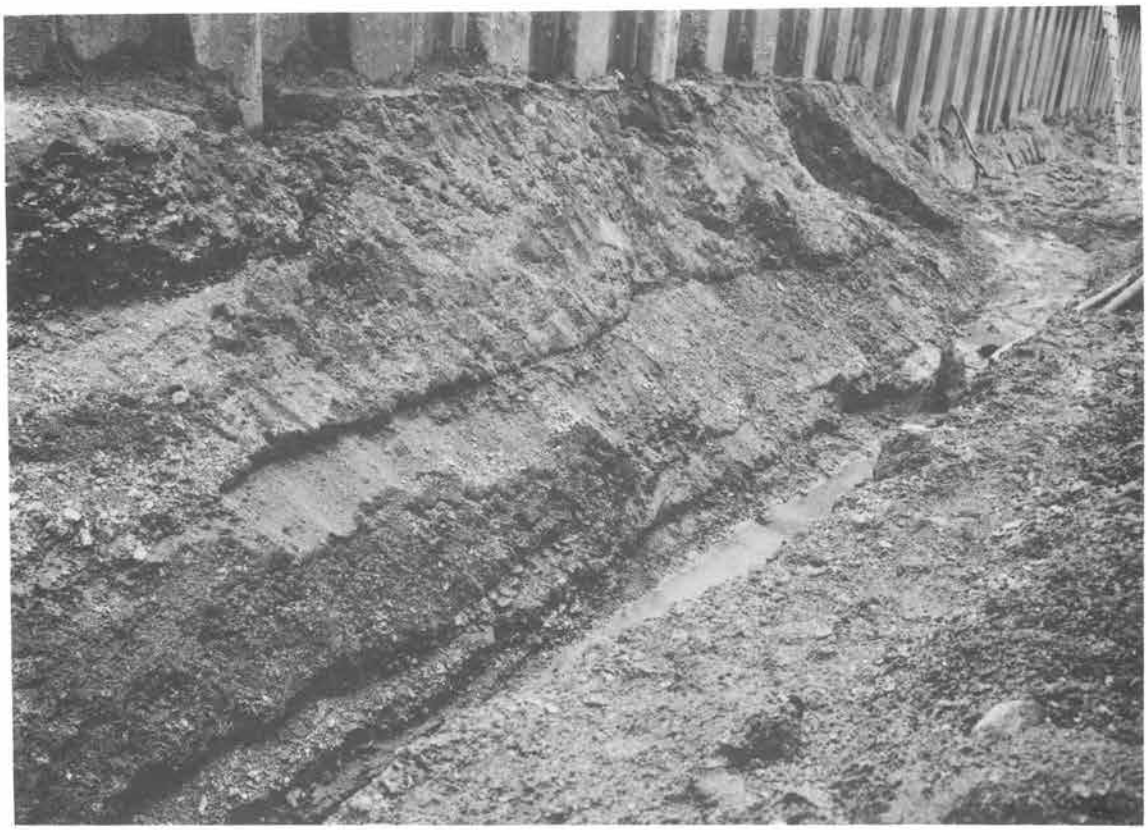
図版6



(1)　Ｅ０～Ｅ４　調査区南壁　土層



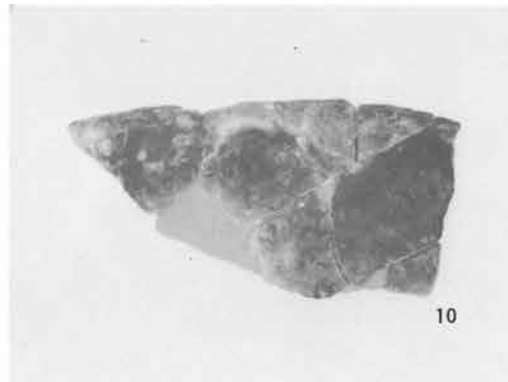
(2)　①　調査区全景・土層（西より）
②　調査区西端部　杭列　杭１
③　ＳＤ３・ＳＤ６・ＳＤ８　南壁　土層
④　Ｅ８－Ｅ11　調査区南壁　土層

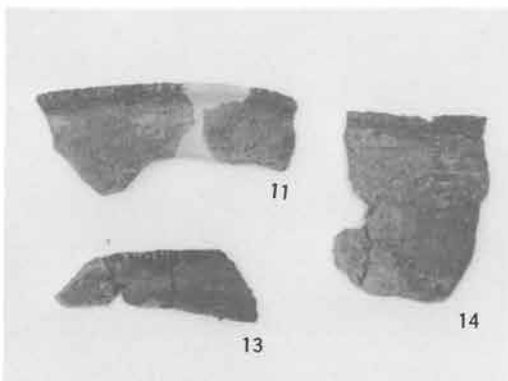


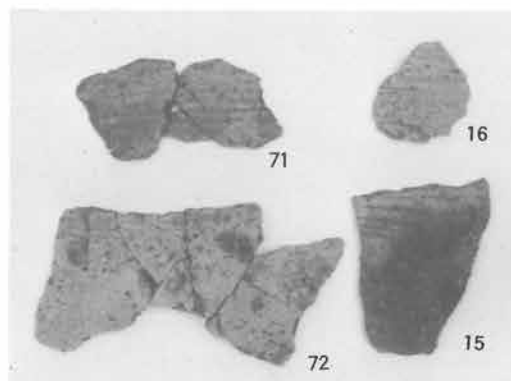
(1) 自然流路Ⅱ

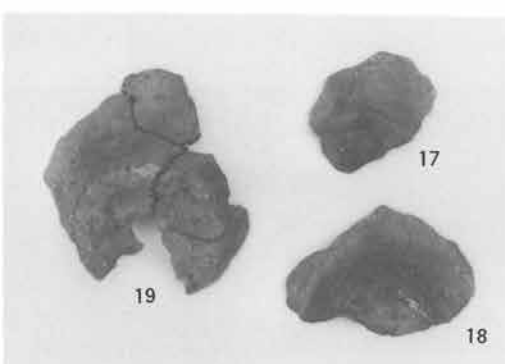
(2) ① 自然流路Ⅰ　木の葉層　　② 自然流路Ⅰ　断面土層
③ 西半の灰色粘泥断割り（木根）　④ 調査区より宮山を望む

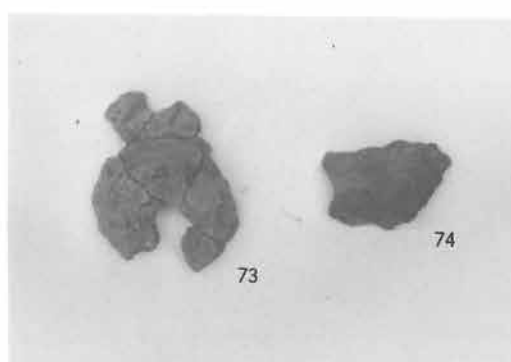
図版8　出土遺物

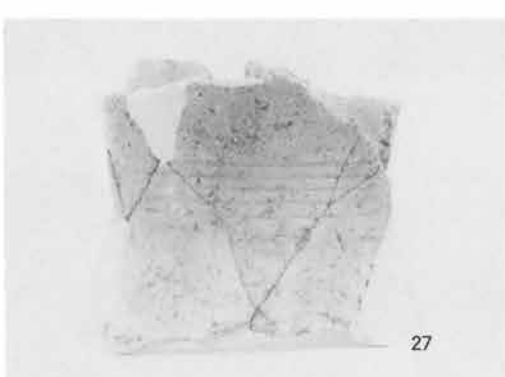


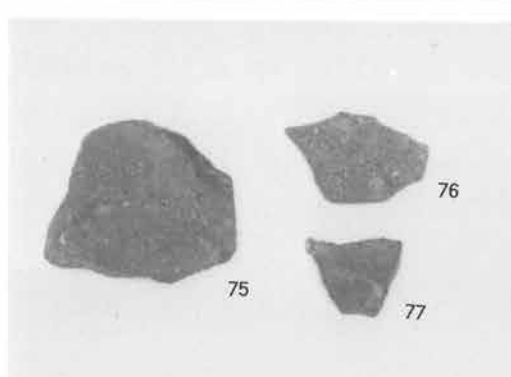








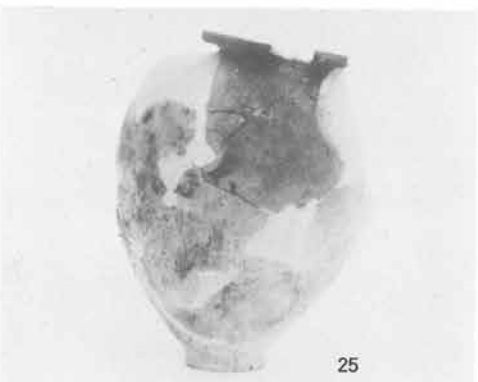


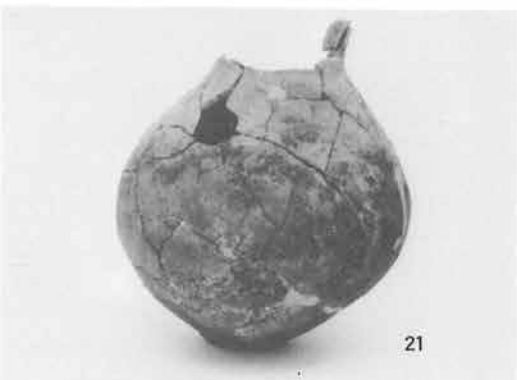


ＳＤ－２下層（10～19・71～74）　ＳＤ－２上層（75～77）　ＳＤ－１（27）

22

20

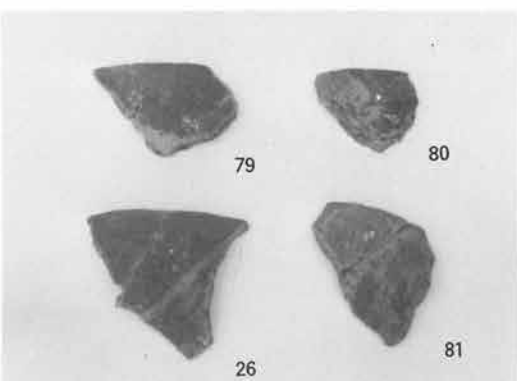

25


21

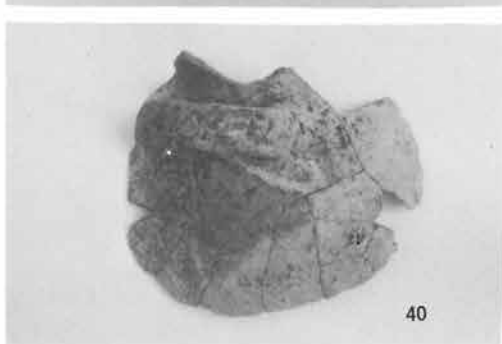
23

24

78

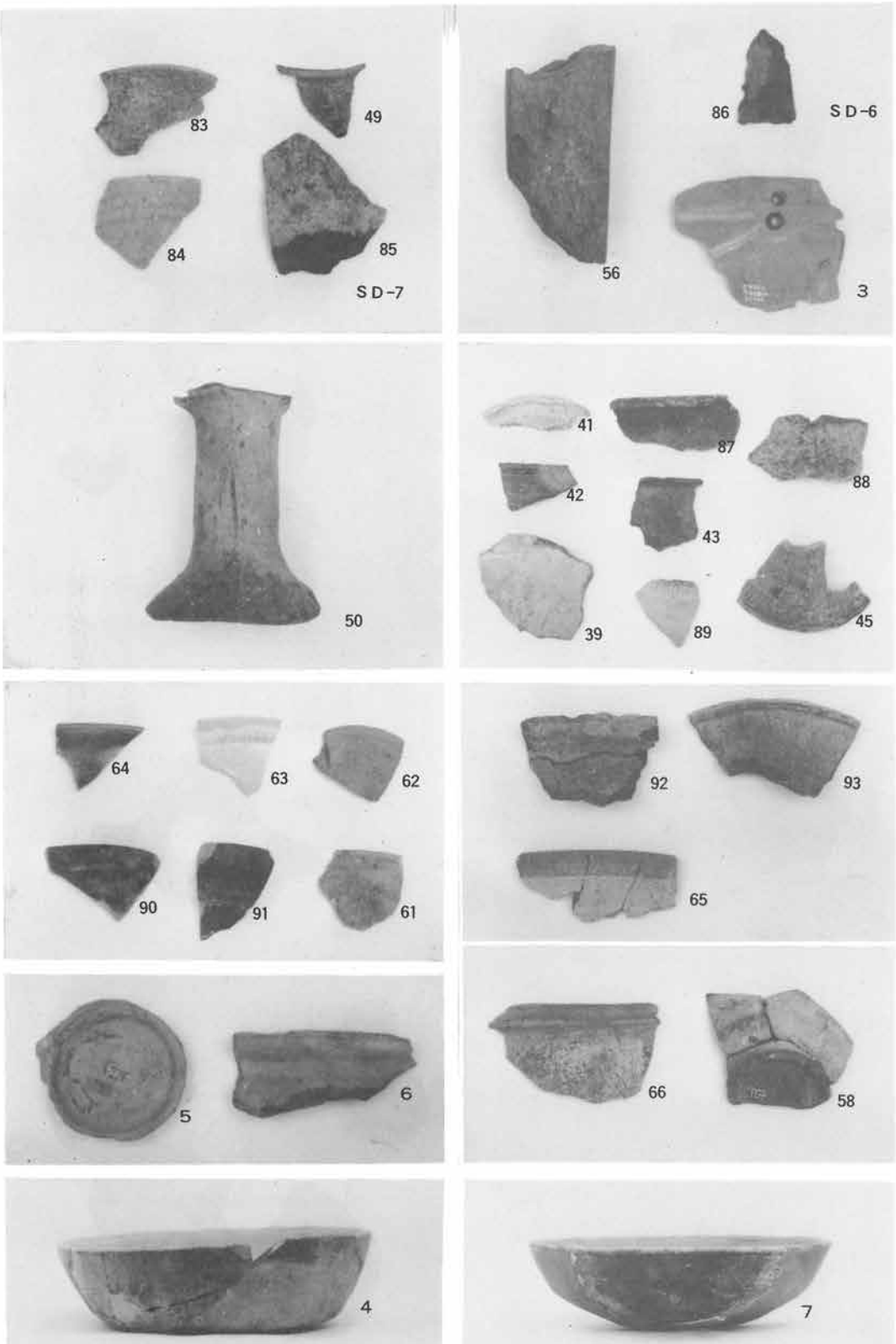

79
80
26
81

図版10　出土遺物



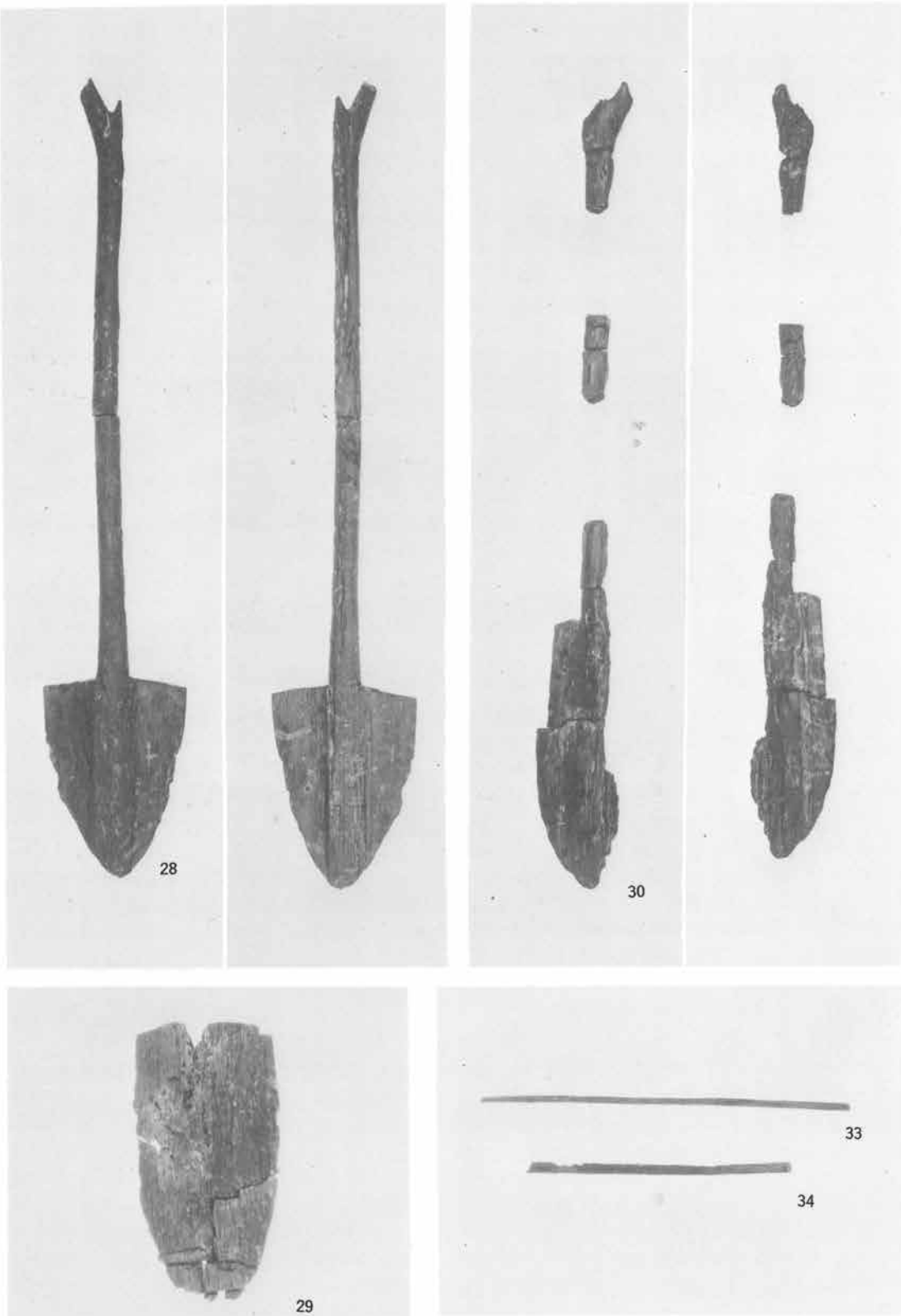
ＳＤ－５（36～38・82）　ＳＤ－６（40・44）

図版 11 出土遺物



北岸　黄灰色粘土－４．７、暗青色粘土－３、黒色粘土－５．６
南岸　ＳＤ６－39.41～45、ＳＤ７－49、黄茶褐色泥砂－50、灰色泥砂－58.66
淡黄灰色泥砂－61.63.64、灰色粘泥－62、灰色砂礫－65

図版12　出土遺物



ＳＤ－１　（木器）

昭和58年 7 月31日

岡村遺跡発掘調査概報

— 亀の川改修工事に伴う発掘調査 —

発　行　　社団法人　和歌山県文化財研究会

印　刷　　邦　　上　　印　　刷